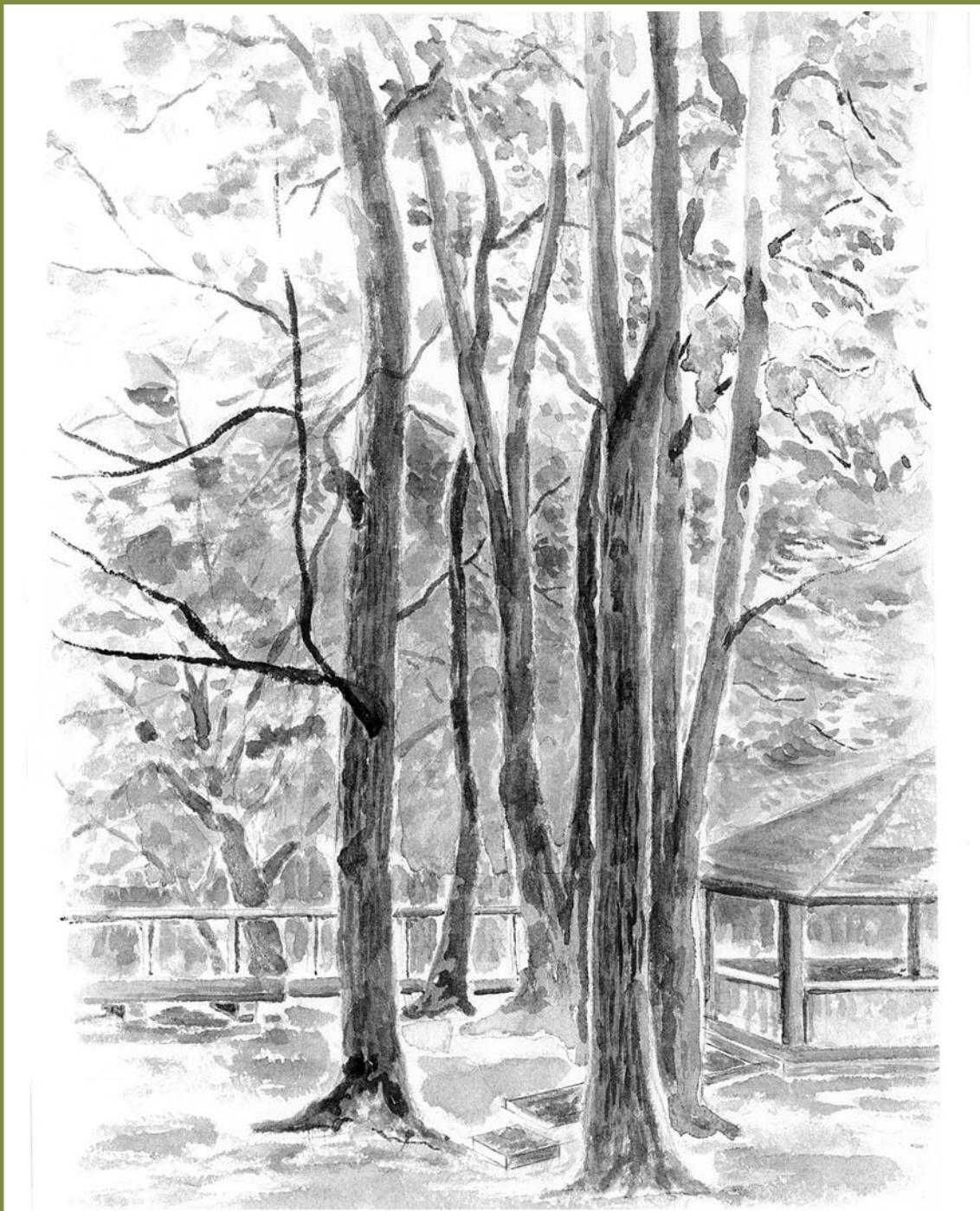


# やまさき文化

’15-3 \* No.34



穴粟市山崎文化協会

◇ 目 次 ◇

## 許せないテロ

宍粟市山崎文化協会会長 福岡久藏

今昔十一夜物語 白拍子有情  
特別寄稿  
二〇一八年に世界が変わる  
新潮会去年今年

二〇一四年を振り返って

短歌

俳句

思い返して

豊かな国

川戸獅子舞保存会のこと

コーラスとの出会い

古代の先進地宍粟の郡

絵とわたし

さつき民踊さん達があつての私

楽しいお稽古日

詩吟との出会い

大好きな和太鼓

やまさきまち歩きガイドの会と

その活動について

時代の流れを想う

平成会の恒例事業と年間テーマ

母に勧められて感謝

歌舞伎と能楽

山崎いさわ 冠句会

居場所～輝ける場所～

歌舞伎と能楽

表紙題字



パリの観光スポットというと、エッフェル塔と凱旋門、そしてノートルダム大聖堂の三つだといいますが、どこも観光の人、人、人で大変です。私は昨年の十月、パリのレビュー・ブリック広場の近くに部屋を借り、そこを拠点にして、パリ、主にシテ島周辺ですが、二十日間ほどスケッチの旅をしました。

アベックで溢れている芸術橋（ボン・デザール）。欄干には愛を誓う鍵が所かまわざいっぱい掛けられています。その鍵に次々と鍵を掛けていくので、欄干が膨らんでいます。欄干の一部は鍵の重みで壊れ、板で囲んでありました。

私など片言の英語と手振り身振りで話すものですから店員さんや周りの人はじっと待っていて、意が通じると笑顔でこたえてくれます。私もホッとします。

また、絵はがきを買うのに、大通りの店でなく少し外れた所にある土産物店をのぞくと、同じ絵はがきが半額だったりして、とても庶民的で愉快です。ところが一月七日。風刺画が売り物のフランスの週刊誌「シャルリー・エブト」の本社が自動小銃をもつた男たちに襲撃され、記者ら十二人が殺害されたというニュースにびっくりしました。

言論を暴力で封殺しようとする残忍なテロ行為です。民主社会の根幹である「言論の自由」への重大な挑戦です。私はパリを身近に感じていただけに許せない思いがします。

そして、この事が差別や偏見を強めヘイトスピーチのような排他的な行為につながらないか心配です。

荒木俊介	堀廣文	清水省三	中瀬大谷	志水司郎	清水志水	大前和司	中瀬和司	志水和司	清水志水	高野吉則	石野和雄	坂本忠彦	内海遊大	猪原紫秀	黒田玲子	栗山節子	田中良子	井原嗣治	三谷香苗	原弘幸	八瀬清志	伊藤圭司	宗平	1			
28	28	27	27	26	25	25	24	24	23	23	22	22	21	21	21	20	20	20	19	19	18	18	16	14	13	13	10

# 今昔千一夜物語

## 自拍子有情

荒木俊介

磯部高麿が主の橋盛光が春の除目で陸奥の国司に任命されたことを知った時、橋家政所の書生を務める高麿はなんとなく不吉な予感を覚えた。国司といえば受領ともよばれ、世上では一受領は倒れたところでは土をも掴めーといわれ、四年の任期の間に巨額の私財を蓄えると噂されるほどの官職である。

だがそれだけではなかった。その裏で国司の中には四年の任期を終え、国司の交代の際不正を隠すため書生に偽の書類を作成させ莫大な財を隠して証拠を残さぬようその書生を亡き者にするという噂が密かに囁かれていることを高麿は知っていた。

その日の夕餉の席で妻の広虫から

「あなた、何か話したいことがあるのです」

と切り出された。家族といえばその妻と確りした気性の一人娘琴重の他に父の代から勤める誠実な下僕弥助爺の四人で、つましやかで平和な暮らしであった。

長年連れ添った妻、思案気な夫の表情が気になっていたのである。妻のその言葉が話を切り出すきっかけになつた。そこで主が春の除目で陸奥の国司に任命されたことを告げた。

「陸奥の国ね、それじゃ、四年の間は別れ々々の暮らしつてことですね」

新任国司の任国に下向、着任する期限は「装束仮」とい、百二十日の猶予があつた。

出発に先立つて天皇、太政官、大臣らのもとに「罷申」と称する出立の挨拶を行い、餞別をもらう。餞別は主に馬や華麗な大うちかけなどで、荷、食糧を運ぶ馬や脚夫は朝廷が負担し、旅装は為政者の権威を誇示するために華美をきわめた。

出発の日も、都からの出口も「政」との総てがそうであつた様に陰陽道によつ

て占われ、都からの出口は三条坊門を出て東海道と決まつた。

当日は妻や琴重、弥助爺らは鴨川三条大橋のたもとに立つて一行を見送つた。一行のなかに高麿をみつけると一抹の不安を抑えながらも笑顔で手を振つて見送つた。

こうして四十日あまりの旅の後、陸奥の国府多賀城に着いた。

三日ばかりの休養で旅の疲れをいやすと地元国衙の官人、雑人から郡司や豪族といった有力者との間で「三日厨」と称する初顔合わせの酒宴が催される。つづいて先ず第一に領内各地の神社を巡拝して廻る。占いが政の重要な行事であった當時ではこれは新任国司にとっては欠かせない務めであつた。

それから初めて新旧国司の任務の引継ぎと同時に国衙内の公文所、税所、出納所、侍所といった各役所の責任者である新旧別当の交代から任務引継ぎなどが行われる。

任務引継ぎで最も注目されるのが国司に代わつて行政に携わる公文所別当の目代である。

多くの場合その国情や風俗、習慣を重んずるという意味でその土地の有為な人材が登用されるのだが、このたびは主、盛光の側近中の側近と目される筆頭家司が任命された。異例であつた。

青白い顔色で瘦せてはいるが、がっちりとした体格で落ち窪んだ眼は自分の思つたことはどうでも通すという意思の強さを現わしていた。

高麿は案じていた通り引きつづいて国衙の政所の書生を命じられた。

当初の一年はこともなく過ぎたが、次の年の春ごろから農民たちの年貢にかかる苦情が出始めた。取り立てが厳しいのである。

国衙内には織物、焼き物、武器などを作る多くの工房がある。そこで働く奴婢達の労働は厳しく、耐えられず、逃亡を企てたものは見せしめのため密かに処刑されているという噂が国衙内で囁かれていた。

四年の任期が終えるという秋の終り頃新任国司との事務引き継ぎのための各種書類の整理という仕事を高麿は命ぜられた。

部屋は離れた別棟の隔離された別室が用意されていた。このことが先ず高麿に不審、不安を抱かせた。整理なら今までの部屋で良い筈である。しかも出入りする人間といえば目代と三度の食事を運ぶ奴婢だけである。

命ぜられる仕事は総て偽書の作製であった。都で噂には聞いていたが、今自分が現実に目代から命じられると一瞬全身から血の気が引くような恐怖に襲わされた。だがここで狼狽えてはならないと必死に冷静さを装い、密かに脱出の機

会をねらっていた。

それは国衙の一隅に平和と豊穣を祈願して祭られている社の祭りの日である。その日は午前の神事の後、昼には各役所、各工房すべてに年に一度の無礼講の酒が振舞われる。

恒例の行事で、誰もが酔いつぶれて僅かな雑人が見回っている程度である。

逃亡するにはこの日をおいて他にはなかった。そのためにも日代に取り入って油断をさせておくことである。仕事は明らかに偽書だが、当の日代の前ではこんなことは何所でも行われていることだと言わんばかりに振舞っていた。

そうして遂に年に一度の国衙の社の祭りの日が訪れた。

午前に国司、日代以下官人、雑人ら揃って社の前で神事が執り行われ、昼の未の刻（午後二時）頃になると振る舞われた無礼講の酒で国衙全体が陽気な空氣に包まれてくる。唄が聞こえ、踊っているのであろう騒がしい音も聞こえてくる。

高磨の部屋にも普段では見られぬ馳走と酒が持ち込まれた。時折日代が見回つてくる。すると酔いつぶれた振りをして寝ている。辺りには空になつた瓶子が転がっている。酒は殆どが出入りの奴婢に飲ませたり、隙を見て廁に捨てたものである。必死であった。

西の刻（午後七時）頃になるとようやく国衙全体に疲れたように暗闇と静寂がおとずれてきた。毎年のことなので警備が緩んでいることもよく知っていた。今をおいて脱出する機会はなかつた。急いで逃走の用意にと食い残した食べ物を懷に入れると、そつと窓の戸を開けて外に飛び降りた。

未だ月は昇つておらず暗闇である。無礼講の夜とあって思つた通り警備も手薄である。

軒下を隠れるように走つて国衙の北西の隅にある櫻の大木の根元にたどり着くとよじ登り、細い枝先から飛んで塀の瓦にしがみ付き一気に飛び下り、塀の外に脱出することが出来た。

しかし塀の外にもようやく逃走に気づいた警備の兵の探し求める声が迫つてきた。そうした暗闇の中を西の出羽の国の国境に向かつて必死に走つた。この国境を越せばもう安心である。自國の悪事がばれるため搜索できなくなるからである。

決死の脱走から数日後高磨は出羽の国のある村の外れの浮浪者や非人の溜まり場に辿りついていた。よくぞここまで無事に逃れて来れたものだとほつとした思いと共に都で気づ

かっているであろう妻の広虫や確り者の娘の琴重、忠実な下僕の弥助爺たちの顔が浮かんできた。懐かしい家族のいる都への望郷の思いが胸を締め付けた。

しかし、今は家族の周辺には橋一族の探索の目が光つてることを考えると容易に都には近づけない。少なくとも半年ばかりはこうして北陸から越後路を転々と溜まり場暮らして、ほとぼりが冷めるのを待つしかなかつた。

ここは都五条大橋のたもとである。今日は愈々橋一族が陸奥国の国司として四年の任務を終え、四十日あまりの旅の後待望の都入りする日である。

陰陽道の占いによつて都への入り口は五条大橋から入京というということでお橋のたもとは迎える多くの家族で賑わつてゐる。

「もうそろそろ見える頃じゃが」

「遅いやないか」

待ちわびる家族の気持ちが大勢の人々の喧噪の間にもうかがえる。

やがて遠くに多くの荷を運ぶ荷駄馬の列を従えた橋一族一行の姿が見え始めた。ざわめきは一層大きくなつてその姿に向かつて走り出す者さえある。無理もない、四年ぶりの再会である。

この出迎えの家族のなかに磯部家一家の家族もいた。病弱な妻の広虫に娘の琴重と忠実な下僕弥助爺の三人である。

やがて一族が五条大橋近くにさしかかると家族の群れは待ちかねたように殺到し、それぞれが一行のなかに有縁の者を認めると歓びのあまり両手を上げて合団をし合つてゐる。

だが、ここにどうしても探し求められない家族がいた。他でもない、磯部家一家の者たちである。広虫、琴重に弥助爺の三人の目が一家の柱と頼む高磨の姿をいくら探しても見当たらぬのである。

堪らなくなつたのか気性の確りした琴重が人垣を搔き分けて一行の中の主だった者と思われる郎従の一人に取りすがるようにして早口に尋ねた。  
「あの、ちとお尋ね申します。磯部の家族のものですが、父の磯部高磨の姿が見当たらないのです。ご存じないでしょうか？」

「・・・」

尋ねられた郎従も当惑気にただ顔を横に振つて行き過ぎてしまふばかりである。

こうして一行が行き過ぎてしまふと出迎えの家族の群れも再開の喜びをあらわにして散つて行つた。

だが、待ちに待った再会も果たせぬまま家に帰った磯部一家は打ち沈んでいた。それでなくても、もともと病弱であった母の広虫は床に伏せてしまった。夫に何かあったことは確かである。

納得のいかぬ琴重は一緒に行くという弥助爺やと共に橋家の邸に向かったが門の前で屈強気な門番たちに邪剣に追い払われるだけであった。ところがその翌朝、早々に橋家の家人の一人が訪れて

「実は同僚の話によると磯部殿は都に帰る三日ほど前に砂金が出るという山の谷川に出かけたまま行方が分からなくなり、搜索はしたが一向に手掛かりがない、やむなく搜索を断念して帰京した」

というのである。それを聞いた途端、琴重は

「父はそんな処に出かけるような人ではありません」

「これはほんの些少だがお見舞いまでに」と激しくつめよったが事面倒とみたその家人は

「これはほんの些少だがお見舞いまでに」と用意してきた金品と思われる包みを置くと逃げるようにして帰っていった。

母はその日をさかに悲嘆のあまり床に伏したまま頭も上がらぬほどになってしまった。医者にかかるような費用もなく弥助爺が知り合いから貰ってきた薬草などを煎じて与える程度である。

容態は日に日に悪化するばかりで次第に衰弱して手の施しようもなかつた。

「お母様しっかりして、お父様はきっと帰ってこられます。氣を確り持つてください」

琴重の懸命な看病もむなしくもともと病弱であつただけに僅か十日ほどの患

いの後あえなく世を去つた。

母が亡くなると琴重の父への思いは一層高まった。砂金採りに山奥に行く様な父ではない。父は何処かできっと生きている。境涯ただ一人になつたといふ淋しさが父への思慕を一層高めた。

「ねえ爺や、相談があるの」

ある日とうとう自分の気持ちを抑えきれず弥助爺やに話しかけた。

「父は砂金採りに行つたりするような人ではありません。きっと何処かで生きていると思うのです」

「そうですとも。お父上はそんな事をなさるようなお方ではありません。琴重様がおっしゃる通りお父上はきっと何処かで生きておられます」

「それで爺や、私はこれから父を捜しに旅に出ようと思うのです。若い女子で弥助爺は励ますようにいった。

も歩き白拍子になって西は遠く太宰府や北は陸奥までも肉親を探し求めて旅をすると聞いています」

家族同様に暮らしてきた弥助爺である。大変なことだが、琴重の気持ちがよく分かるだけに止める気持ちはなれなかつた。それに一度思い立つと決して諦めない琴重の気性もよく知っている。

「琴重様、お父上を探して陸奥の国に旅立ちなさいませ。遠国の旅は物置小屋の軒先やら時には野宿も覚悟しなければならないといわれています。それには丁度春先で時候も良い頃です。この弥助奴も最後のご奉公でございます。何なりとご助力があれば仰せつけくださいませ」

いってしまうと迷いが消えた。

「琴重様なら白拍子がお似合いです。お父上を探すためなら爺が舞の衣装や道具は担ぎますよ」

「私も白拍子の様な衣装を着て今様に合わせて舞つてみたいと思うことがよくありました」

「白拍子になられるなら笛は私奴が務めます。知り合いに笛の好きなのが一人いますからその者に習いますよ。なーに今様の唄の譜一つくらいなら琴重様が

舞いを習つておられる間に吹けるようになりますよ」

その翌日から二人は旅の準備にかかりた。父も母もいなくなつた都に未練はない、ただ父に会いたいという一心であった。

白拍子の舞いは六角堂近くに住む茅野禪師という白拍子の師匠について習うこととした。弥助爺が噂で聞いていて、老尼だが苦労人で面倒見のよい師匠だということでのその屋敷で習うこととした。

かなりの弟子がいて、おもに神社や酒宴などの席に招かれて出向いていたが、琴重の場合はただ好きで一ヵ月ばかり習うということで入門を許された。

弥助爺が期待していた通り十日も習うと舞いも唄も見違えるほどの上達ぶりで茅野禪師も驚くほどである。

それから二十日ばかりの稽古を終えて茅野禪師の屋敷を辞すとその日から急速予備の衣装や脚絆などの旅立ちの用意にかかり三日後には準備を整えて都をあとにした。

慌ただしい一ヵ月であったが、気が張り詰めているせいかあつという間の一ヵ月であった。

早朝卯の上刻（午前六時）頃三条大橋を渡つて山科をぬけ琵琶湖のほとり大津に着くと村の長者と思われる屋敷を訪ね、その夜は屋敷の広間で旅の初めて

の白拍子の舞いを弥助爺やの今様の笛にあわせて披露した。

「ひとの音せぬ曉に

ほのかに夢にみえ給ふ

仏のみかは君もまた

うつぶならぬぞあわれなる」

都からの白拍子だというので庭にまで溢れるほどの村人が見物に集まり、琴

重の優雅な舞に酔いしれた。その夜は主の好意で屋敷に泊まり、翌日は難所越

えと言われた鈴鹿峠も無事に越えて桑名に着いた。

桑名から三河、駿河の旅も琴重の白拍子の舞いの評判は相変わらず高く、舞

台も宿もその土地々々の有力者が進んで申し出てくれるほどである。

遠江、相模と箱根の峻嶮も無事に越すと関東の地である。山城、摂津など畿

内の国柄と比べると鄙びた感じは否めない。

武藏の国に入ると都からの白拍子が来たというので行く先々では西国とは違つ

た人気である。琴重の唄う今様も、合わせて吹く弥助爺の笛も今迄の旅の演技で格段に上達している。

「遊びをせんとや生まれけむ

戯れせんとや生まれけん

遊ぶ子供の声きけば

わが身さえこそゆるがるれ」

舞いの終わったあととの素朴な村人たちの拍手にも熱気がこもっている。

こうして武藏から常陸、下野を過ぎるといよいよ白川の関である。ここから先は人家もまれで三日ばかりの旅の後国府多賀城に着いた。しかし国府とはいえ殺風景なところでもあり、また父のこともあるので素通りして平泉に向かった。

ここは陸奥の豪族藤原一族の居館のあるところである。金の産地だけに豊かな財力にものを言わせて寺院や建物からその内部の装飾まで金をふんだんに使い、都の画工や職人を招いて豪華な都風に飾られている。

この地は父が帰国直前謎を残したまま行方が分からなくなつたところである。「砂金の出る谷川の山奥、女子の姿では目立ちます。この爺奴が農夫の身なりで出かけましょう」

ということで弥助爺が農夫風の身なりをして行ってみたが全く手掛かりはなかつた。

「途中で農夫風の男に出会ったのでお父上のことを尋ねたところそんな男が谷

川辺りを登つてゆくのを見たって話は聞いたこともない、それにあの辺りは役人の目が厳しくて近寄れないところだといつてました」

憔悴したような弥助爺やの顔を見るともうそれ以上聞けなかった。無理もない、都から陸奥まで長い旅の間白拍子の舞いに合わせて笛を吹くだけではない、

荷を背負い、宿のこまごまとした世話をまでしてくれたのである。

「爺やご苦労様でした。お礼をいいますよ。今夜はもう早く休みましょう。それにこの平泉は美しいところですから暫く滞在して爺やも休養がてら様子を見るにしましょう」

こうしてしばらく滞在したが一向に父の消息の手がかりになるような風闻はなかつた。最も期待していたところだけに気落ちも大きかつた

五日ばかり滞在して後、何の手掛かりもなく、心残りのまま陸奥の国を去ることにした。次の旅は道を変えて出羽の国に出て父も辿つたであろう南の越後路に向かうこととした。

ただ気がかりなことがあった。それは弥助爺の憔悴したような表情が良くならないようと思えたからである。越後、越中、越前から琵琶湖の近江までの道のりは来た道の半分程だが山道が多いだけに爺やの体調が心配であった。

出羽の国を出て越後路に入り、越中は山越えは無理とみて、少し歩き辛いが親不知の難所を抜けることにした。越前を目の前にした頃案じていたとおり「琴重様、一寸休んでくだされ」

「どうしたの爺や」

振り向くと右わき腹を抑えていた

「どうなの、爺や、痛むの」

案じていたことが起きた思いであつた。だが

「痛みますが、なーに大したことはありません。半時ばかり休めばすぐ直る

思います」

顔色は蒼白とまでではないが血色がない。肩の用意して来た包みから薬を取り出して竹筒の水で気つけ薬を飲ませて休ませた。

弥助爺が言った通り半時ほど休むと体調は少しよくなつたが顔色は相変わらず良くない。琴重はこれから先の旅に不安なものを見えた。

越中を過ぎ、越前の国府、武生に着いた日は近くの村の長者の屋敷で舞いを演することになった。夜になると屋敷には都の白拍子が来たというので何の慰みもない近くの農民たちが男といわず女といわず嬉々として集まってきた。

弥助爺やの吹く笛に合わせて今様を唄いながら舞いを舞う琴重の姿に見物の

人々はただうつとりと見とれて、終わった後の拍手はいつまでもつづいていた。

その夜は主の勧めを幸いに屋敷に泊めてもらうことにした。裕福な主は二、三年に一度は京見物に出かけるということで都の話に花が咲いた。

この様なことは今までにはなかつたことで話をするうちに越前という国がそれほど都に近いということが感じられ、都恋しの望郷の思いに悩まされてなかなか寝付かれなかつた。

その後の弥助爺やの病状は緊張の糸が切れたのか急速に悪化し始めた。その後発作が二度ばかりつづくと用意していた僅かばかりの薬も無くなり、発作も次第に長くなり始めた。治まって歩き始めても木枝の杖を頼りでなければ歩けないといった状態である。

「琴重様、爺奴<sup>おやぢ</sup>がこのような手足纏いの様な厄介者になつてしまふて申し訳ありません。もう爺などにはかまわざ……」

「爺や、何をいうのです。今まで白拍子の旅が出来たのも爺やのお陰じゃないですか。負つても都に連れて帰りますよ」

憔悴して涙をにじませた顔を見て思わず琴重は爺やを抱きしめた。抱いて初めてこれが、出発に際して笛も吹きます、荷も担いますと言つてくれた爺やかの心は痛んだ。

越前の国府を後にするともう都は目の前である。だが越前から近江の琵琶湖畔に出るには険しい山道がある。そこを越えれば琵琶湖畔である。歩けなければ舟で大津にも出られる。

だが弥助爺の容態は薬もなく頬はこけ、苦しさを見せまいとする表情がいじらしく、山路にさしかかったころには杖だけではもう歩けそうにも見えなかつた。どうやら臓腑を患つているらしかつた。

「爺や私の肩につかまつて。背負つてあげます」

「いいえ、いいえ：それは勿体のう……」

苦しいのかとぎれとぎれに声も弱く、遠慮するのを無理に肩に手を回させ背負おうとしたその時後ろから

「おっと、その娘ご、難儀してなさるようだがこの坂道じゃ無理だ。あっしが肩を貸しやしょう」

突然の声に驚いて振り返るとそこに一人の男が立つていた。粗雑な身なりだがこの辺りの農夫には見えなかつた。笑顔は見せているのだが、なんとなく馴

染めぬ表情である。

啞然としている琴重を尻目に無造作に苦しげで戸惑い気味な弥助爺を軽々と抱き上げて肩にのせ

「さあ、登りましょうぜ。この辺の事情には疎い方々のようだ。こここの山越えは難所で急がなきや、陽の暮れねえ中にや越されませんぜ」

と先に立つてすたと登り始めた。男の言う通りであつた。病人を抱えて山中で日が暮れては途方にくれる。

不審な気持ちのまま山を越すためには仕方なく男のいうがままに従うよりもかかりになり始めた。

昼過ぎにようやく頂上と思われるところに着いた。男は弥助爺を近くの草むら寝かすと

「一寸用を足しに」

と言つて茂みに入つて行つた。肩の揺れがきつかったのか草むらに寝かされた弥助爺はぐつたりとして目は閉じたままである。目を開ける気力もなさそうである。

「爺や、しつかりして」

その声にしばらくして薄目を開いて口を動かした。が、何を言つてゐるのかよく分からないので耳を口元に近づけた

「もう：いけま……」

もういけませんといつてゐるようであった。

「爺やつ、しつかりして。もう都はすぐですよ。気を確かにして」

しばらくして再び虚ろな薄目をあけて

「あの男：ようじん……」

よく分からぬがあの男には用心せよといつてゐるようであった。

「爺や、大丈夫ですよ、安心して」

親切そにはしてゐるが時折不用意に見せる狡猾そうな目に琴重もそれなく

気づいていた。

爺やは死にそうになつた間際にも自分のことを案じていてくれているのだと思つて爺やがこの上なく愛おしいと思うと同時にこのような目に遭わせたという罪の意識にさいなまれた。

間もなく男は帰つて来て傍らの石に腰をおろすと

「ああ、くたぶれた。爺さん軽いようだが、坂道はえらい。陽の傾きから見りゃ

昼も過ぎてゐるようだが、娘ごさん食い物は持つてねえかえ」

と求めた。弥助爺やのことばかりに気を取られて昼の食事のことなどは全く頭になかった。

「これはまたお世話になりながら氣の利かぬこと、宿を発つ時に用意してあります。今すぐ」

氣の置けないところのある男なのだがこの男に出会つたからこそこの頂上まで来れたのである。そう思えば感謝しなければならないと自分にいいきかせた。食事を終えてしばらくすると

「おっと、べぐべぢちやいらねえ。雇はとっくに過ぎてらあ。」

いったかと思うと立ち上がって弥助爺によりそつてゐる琴重のところにきて

「この分だと急がなきや日暮までに麓に辿りつかねえですぜ」

もうこの男のいうがままに任せたよりなかった。下り坂は背中の爺やには搖れが激しく昇り坂より厳しいらしく弱弱しく喘ぐような声はしげくなつてきた。が、それもしばらくで、やがて静かになつて時折微かにうめくような声がもれていた。

「爺や、しっかりして、もうすぐ麓につくからね」

琴重は終始爺やに寄り添つて手をにぎつけていた。麓に着いた時はもう辺りは薄暗くなつていた。

「すぐそこに小屋があるからそこまでいって爺さんを寝かせやしよう」

男はこの辺りの様子をよく知つてゐるようであった。小屋というのは物置き小屋の様で麦藁が散乱している片隅に古びた農機具などがたて掛けである。小

「やれやれ、世話をやかせるぜ」

と無造作に下そとするのを傍らに寄り添つてゐた琴重が受け止めて厚そうな麦藁の場所を選んで寝かせた。腕もだらりとしたままで自分で動かす氣力もなくなつてゐるようである

「爺やしつかりして」

だが反応はなく目は閉じたままだが息は微かにあつた。

「爺さん今夜が山だな」

琴重には他人ごとのように聞こえた。だがなんとか山を男のお陰で越せたのである。不足はいえない。

明け方近くの薄暗い頃寄り添つて寝ている爺やが急にうめくような小さな声を出して手を動かそうとしているのだがなかなか動かないのである。初秋の寒

気が小屋の中にも忍び寄つてゐた。琴重は急いで爺やの両手を握りしめた。それが分かつたのか急に息が荒くなつたかと思うと微かに目を開いています。琴重様といつてゐるようであった。爺やの冷たくなつた両手を握りしめる手に力をこめた。

「こと：」

琴重様といつてゐるようであった。爺やの冷たくなつた両手を握りしめる手に力をこめた。

「爺や琴重はここにいますよ」

すると再び

「こと：」

といつたかと思うと急に両手の力がなくなり目を閉じた。

「爺や死なないで」

だが爺やは再び目を開くことはなかつた。

こんな処まで連れて來た私が悪かつたといおうとしたが言葉にはならなかつた。

夜が明けると男はもう去つて行くかと思われたが弥助爺の遺体を放つておくわけにもいかぬから茶毬に付してはといい出した。この男とは早く別れたいと思ひながらも渡りに舟のような話である。

「そうですか、茶毬に付していただけますか、私もそう願つてゐたのです」

男はその返事を待つてゐたかのようには茶毬に付すにはかなりの薪がいる上に手間がかかるから今一人仲間を探してくるから暫く待つていてくれと言つて小屋を出て行つた。

仲間という男を探すのに手間取つたのか帰つてきた時は

午の下刻頃(午後一時)を過ぎていた。

「遅くなつちまつた。急がなきや日暮までにはすまねえぞ、さあ薪集めだ」

仲間というのは飛ぶような歩き方の小男で、その男を急がせて辺りの枯れ木などをうず高く集めると琴重にも手伝わせて弥助爺やの遺体を小屋から運び出しぶし、少し窪んだところを選んで横たえると

「さあ娘ごさん、最後の見納めだ、よおーく拌みなせえ」

と形ばかりの心配りを見せて琴重が遺体に取りすがつて泣くのを

「さあ早くしなきや陽がくれますぜ」

と立ち上がりらせ、集めた枯れ木を見る見る積み上げると用意してきたらしい火打石を打つて火をつけた。

二刻ほど経つたころ弥助爺やの遺体は平たく灰になつてゐた。辺りは既に薄暗くなつてゐる。

「あつしは若けえ頃親父を亡くしてのど仏つてのを薄々覚えているから見つけ

てあげますよ」

といつてから平たくなった遺骨の喉仏と思われる辺りを搔き分けていたかと思ふ

「ほらこれですよ」

といつてとりあげて琴重の用意した布切れの上に置いた

「こんなになってしまって：爺やゆるして」

琴重は思わずあふれ出る涙に立っている氣力もなくその場に泣き崩れた。

「気持ちは分からねえではないが、そうして何時まで泣いてたって爺さんは帰つてきやしねえ。さあ、陽の暮れねえうちに旅支度をして直ぐその先にある村まで案内しやしょう」

男の声も虚ろに聞こえた。この先どうなつて行くのかという考えもまとまらぬまま爺やの遺骨を胸に抱きしめて小屋に入ると荷物を纏めて旅支度を整えて小屋の外に出た。

外では男たちも遺体を焼いた跡の灰などを取り去つて枯れ草や木切れをばら撒いて分らぬようにして二人は何かひそひそと話しあつて出でてきた琴重の姿を見ると急いで分れた。

「さあ、うす暗くなつてきた。急がなきや陽がくれますぜ」

まだ気は静まらず、考へも纏まらなかつた。急かされるままに男の後に従おうとした。

その時いきなり後ろにいた男が琴重を羽交い絞めにしたかと思うと申し合わせたかのよう前にいた男が何時の間に用意したのか布切れを取り出して素早く猿ぐつわをした。

あつという間の出来ごとであつた。

声も出ず、つづいて目隠しをされると二人に担がれて琵琶湖の岸辺でまで運ばれ、あらかじめ用意されたと思われる小舟に乗せられたかとおもうと、夕闇せまる湖面を南を指して何處へともなく消えていった。ほんの一瞬の出来事であった。二人は旅によくある人買いの女衒めげんだったのである。

多賀城の国衙を辛らくも逃れた高磨は、奥羽から越後、越中、越前と浮浪者や非人の溜まり場や散所などを転々としながら半年ほど経つた頃橋一族の目をばかって目立たぬよう浮浪者の身なりで密かに都に着いた。

都に入つてみると莫大な財を得て帰国した橋一族の権力は富に群がる宮廷人達の牛車で門前市をなす有様である。だが一步内裏を離れて市中に入ると陸奥

の国での酷政の噂や家人たちの市中での横柄な振る舞いなどで悪評である。

だが昼間の行動は危険であった。しかし、何よりも気になるのは家族三人の消息である。夜半にそつと身を隠して懐かしい我が家に近づいてみると雑草の茂った空家である。驚いて夜半を利して消息を調べてみると妻は死に、娘の琴重と弥助爺は歩き白拍子となつて自分を探して陸奥の国に旅立つたというのである。

急いで氣を取り直すと琴重と弥助爺が辿つたと思われる近江から尾張、三河への旅に出発した。歩き白拍子の旅というのでその足跡はすぐ明らかになつた。演じた村々での評判は良く、出来るものなら来年も来てももらいたいといわれるほどで、また弥助爺やが笛を吹いていたことも知らされてその誠実な忠勤ぶりに感謝せずにはいられなかつた。

白拍子の一行ということで足跡は明らかで二十日ほど後には陸奥の国に入っていた。多賀城の国衙を目の辺りにした時は思わず偽書の作製を命じられた時の悪夢が蘇ってきた。

琴重らがこの陸奥では平泉に三日ばかり滞在して自分を探していたことも分かった。

その後奥羽から越後、越中、越前へと二人の足取りは容易に判明したが越前の国府武生から先の行方が神隠しにでも遭つたようふつつりと切れてしまつてゐるのである。三日ばかりかけて越前と近江の国境辺りを探してみたがどうしても分らなかつた。

仕方なく万策尽きた思いで不安な気持ちのままそれでも都に帰えつてゐるかも知れないという一縷の望みをたよりにひとまず都に帰ることにした。

都に帰つてみたものの琴重らの行方は依然として掴めなかつた。ただ氣の体まることがあつた。それは橋一族が受領の頃の悪政や家人たちの市中における度重なる横柄な振る舞いの噂が高まるにつれて帝の激怒を買ひ、官位剥奪のうえ都追放の刑に処せられていたことである。

もう隠れることもなく琴重たちを探すことが出来るようになつたと思うと橋一族への恨みや憎しみも不思議と消えた。しかし、その後も肝心の二人の消息は全くといってよいほど分らなかつた。

多くの人々の集まるところは万一一にも二人の消息が得られないかとつとめて出かけた。

そうした人の集まるところの一つに東山の麓、吉水に法然と称する僧侶が専修念佛の教えを説いていた庭があつた。学識にかたよる叡山の教えに飽き足ら

ず市井に降りた僧であった。

集まって来るものといえば殆んどが浮浪者や非人、遊女くずれといった食い詰めたものばかりである。そうした人々の中にでもこの人ならと思える相手に出会えば琴重らの話を出して消息を知ろうとした。

こうして初めは琴重らの消息を得ようとして法然の説話の庭に来ていたのが、聞くともなく聞くうちに今の自分の時には盗みもしなければ生きて行けない浮浪者同様の暮らしぶりを省みて、次第にその教えの世界に引かれて行つた。

難しい学識や地位もいらない、人は皆仏の前では生まれながらにして平等であり、唯ひたすらに南無阿弥陀仏の念佛を唱えれば仏の慈愛は慈雨のようなもので悪人でも淨土に往生できると説いているのである。

叡山一の学僧と言われながらもその様なところは少しも感じられない温厚な人柄である。高麿は次第にその法然上人にひかれて門徒となり得度し、修業の後許されて遍歴の旅に出た。勿論琴重らの消息を知る縁にもなればという願いもあってのことである。

こうして布教をしながら畿内一円は勿論諸国も限なく回つた。道端で物乞いの若い子女を見かけると、若しやと近寄って確かめることも度々である。時にはまた芸を売つて諸国を巡る傀儡の群れに出会うと二人の消息を尋ねることも忘れなかつた。が依然として全く手掛かりはなかつた。

徒に時は過ぎ、過ぎ去つた過去のことが諦めとともに遠い別の世界のことのように思われてきた。

空しく十年の歳月が流れた。

ある年、諸国遍歴の旅を終え都に帰つて吉水の庭で久しぶりに師法然上人の説話を聞いていたとき思わず消息が耳に入つた。

近くにいた遊女崩れと思われる女から江口、神崎の遊女で若い頃歩き白拍子となつて陸奥の国まで父を探して旅をしたという遊女が宮廷の酒宴に選ばれ、招かれた遊女の中にいたという話を聞かされたのである。

その頃宮廷では和歌などにも秀でた高い教養のある遊女をえらんで酒宴に侍らせていたのである。

現実の世界に引き戻された思いであった。

その遊女は紛れもなく琴重に違いないという確信を得たのだが、ふにおちなことがあつた。

というのは以前江口、神崎の遊里は若しや人買ひの手で遊女に売られているのではと思案して伏見湊や山崎湊などと共に尋ね歩いたのだが、全く手掛かり

がなかつたのである。それが今になってどうしてそのような話が耳にはいったかということであった。

しかし、今はそのようなことを詮索している時ではなかつた。直ちに旅支度を整えると急いで江口、神崎の遊里に向かつた。

ここは昔から淀川の入口で宋船など貿易船も出入りするほどの湊であるだけでなく宮廷人達が熊野詣などの時には必ずといってよいほど立ち寄る遊里である。

川面には遊女を乗せて行き交う小端舟には遊女に大傘をさしかけて世話をする俗にいう”大傘さしの女“がいて客船にすり寄せて客を誘う風景は江口、神崎の湊の一つの風物詩としても諸国に知られている。

江口、神崎の湊に着くと宮廷人の酒宴に招かれる遊女ということで探す遊女宿はすぐに見つかつた。名前も妙智太夫といふことも分かつた。宿を訪れて案内を乞うと、宿の長と称する女将の老女が現れて僧の姿を見ていぶかしげに尋ねた

「どなたさままで」

そこで高麿は実は自分が遊女妙智太夫の父親であることを告げた。途端、「あの妙智太夫の親御様……」

老女は絶句した。驚いたのであらう、しばらくして

「話したいことは山ほどあります。実のところ今妙智太夫はこの夏以来少し疲れがでましてなあ、この宿よりも”大傘の女“の家の方がよう休まると思いましてここには居りません」

「疲れが出たとは……」

高麿は思わず問い返した。

「なーに案ずるほどのことはありません。妙智太夫のこと、そのうちにきっとよくなります。そこで今何の前触れもなく行くよりも先に小女にでもこのことを知らせにやりますからその間に妙智太夫が私どもの宿にあづかるようになつた経緯を手短にお話いたしましょう」

招じ入られた座敷に対座すると老女は話し始めた。

「妙智太夫こと琴重が父を探して歩き白拍子となつて陸奥の国まで行き……」

さらに越後、越中、越前から近江の琵琶湖畔の山麓まで来た時に弥助爺は病と過労で死に琴重は人買ひに渡わられて太宰府の遊女宿に売られたのだが、忠実な老僕弥助爺を旅の過労で死なせ、自らは遊女に落ちぶれたことを悲しんで身を隠すようにしていった妙智太夫こと琴重を憐れんで救つてくれたのが中国宋の

交易商人洪永孫であった。

「このお方は日本人には見られない心の広い優しいお方で商いで都に上がられる時は何時も私共の宿を観音にして下さっていました。妙智太夫も心をゆるしたのでしょう、初めて自分の身の上を明かしたのです。それを聞かれた洪様は哀れがり、早速身請けし私共のところに連れてこられ、この妓に礼儀、作法は勿論和歌なども習わせ、都の宮廷人たちの酒席に侍らせるようしてくれ。この妓なら年の三つ四つくらいは若づくり出来る妓、太宰府の田舎にいるより都に逢わしてやつてくれと頼まれたのです」

太宰府までも旅をしたのだが、それでも探し出せなかつた理由が分かつた。

大方を話し終えた老女は

「それでは妙智太夫も待つてることゆえそろそろまいりましょう」と立ち上がった。

宿を出ると西の空には薄雲がたなびいて赤く染まり、辺りはようやく夕闇に包まれようとしていた。しばらく行くと人家は途絶えて道の東側には葦が茂り、その合間に河口に近いためか淀川が動くともなく流れている。

「申し遅れましたが今から行く大傘の女も若い頃は荻野という遊女でした。この荻野も元はさる宮廷人の息女でしたが、さる年の戦乱で孤児となり、この江口、神崎の里に売られてきましたが、よく努めまして今は大傘の女として生まれた境遇も同じということで妙智太夫の世話をしてもらっています」

「それは有難い、なにかとお気づかいを頂きお礼の申しようもございません」

折から鐘の音が西の空から静かに響いてきた。

「夕暮れに聞く鐘の音は又ひとしおでございます」

「心が静まる思いです」

「あの鐘の音は私共が世話をなっているお寺の鐘の音でございます。寺の住職様はあの鐘の音は一あれば諸行無常と告げていますのじゃーと仰せになります」「まことにその様でございます。ところでつかぬことをおたずねしますがお世話になつてはまだどのようなことで」

「これは又、つい鐘の音に誘われてつまらぬことを申しました」と間をおいてから

「遊女という者はその多くは親兄弟も分らず死後の弔いをみてくれる者もおりません。そこでやむなく無縁仏としてあるお寺に塚を築いて弔らつてもらつてゐるのです」

「そういうことはつゆ知らず、不羨なことをお聞きしました」

「お気になさいますな。そういう私もその中の一人でございます。そういう意味では苦労はしましたが妙智太夫は幸せ者ですよ、こうして親ご様に会えたのですから。おや、話が弾んでおりますうちに大傘の女の家が見えてきました」

前方の葦の茂みの合間に三、四軒のとまや風の小屋が見え隠れしていた。

「あの手前から二軒目の家です」

家の前に着いて声を掛けるとすぐに大傘の老女が

「お待ちしていました。妙智太夫もお待ちかねです。さあどうぞ」

手を引かんばかりにして招じられた。宿の長の老女も手で高麿を先へと促した。家といつても粗末な衝立で仕切られた部屋である。気配を察してか待ちきれず

「お父上」

懐かしい琴重の声が衝立の蔭から聞こえてきた。まだ床から立ち上がりがない様であった。衝立の蔭にまわると琴重は床に座っていた。やつれた感じである。

「お父上、懐かしい」

十年という歳月の劳苦の影は隠しようもない。

「琴重、許してくれ、父が陸奥の国などに……」

「いいえ、お父上、歩き白拍子などになって弥助爺やまで道連れにしてあの様な姿に：母上も……」

琴重が涙の目顔を部屋の片側に向けた。棚の上には二つの小さな白い包みが置かれて燈明が灯されている。話は宿の長の老女から聞かされている。

「妙智太夫はまだ幸せです」

無縁仏の塚の話の時に聞かされた宿の長の老女の言葉が蘇ってきた。高麿はしっかりと琴重を抱き締めた。



# 二〇一八年に世界が変わる?!

独立行政法人 産業技術総合研究所 計量標準総合センター

八瀬清志

(栃木市山崎町出身)

その後、一八七五年に当時の先進十七か国により「メートル条約」が締結され、長さと重さ（質量）の基準として、上記の長さに対応する「メートル原器」と、1立方デシメートル（1リットル）の水の重量を標準とする「キログラム原器」を用いることとなった。この原器は、白金とイリジウムの合金であり、作成には当時の冶金学と精密天秤などの計測技術が駆使された。日本は、明治維新の直後にもかかわらず、一八八六年にはその条約に加盟し、上記の両原器をアジアで初めて入手している。今でもその原器は、つくばにある産総研の金庫に厳重に納められている。<sup>2,5)</sup>

私は、大学進学で大阪に出て以来、京都、広島と移り、現在は茨城県つくば市にある研究機関で仕事をしている。研究としては、電子顕微鏡による原子・分子の観察（京都）、マーガリンやチョコレートの成分である脂質の物性研究（広島）、水面上の高分子膜の凝集機構（ドイツ）、そしてシリコンに代わる有機材料を用いたフレキシブルなディスプレイや照明、太陽電池などの研究開発（つくば）を企業や大学の方々と一緒に携わってきた。<sup>1)</sup> 本稿では、現在所属している産業技術総合研究所（略称・産総研）の計測・計量標準に関わる研究業務を紹介し、科学技術と産業の世界で起こっていることを知つていただきたい。

今から二〇〇〇年以上前の一七九九年、フランスにおいて「メートル法」が制定された。その宣言文には、「すべての時代に、すべての人々に」とうたわれている。従来、長さの基準（ものさし）は、それぞれの国王、権力者が、ひじから中指の先までの長さ（キューピット・メソポタミア）などを基準として決めてきた。しかし、円滑な商取引のためには、その基準をそれぞれの国で勝手に定めるのではなく、国境を越えて統一する方が、問題が起りにくいことはいうまでもない。<sup>2)</sup>

このメートル法では、長さは「地球の大きさ」を基準（北極から赤道までの子午線の一千万分の一）と定めた。そのため、フランス革命のさなか、二人の天文科学者（メシェンとドゥランブル）がパリを起点としてバルセロナからダントケルクまで南北に精緻な測地を行い、地球一周の長さは四万キロメートル近くであると正確に見積もった。<sup>3)</sup> ちょうど、そのころ、日本においても伊能忠敬が日本全国を踏破し、現在でも通用する日本地図を完成している。<sup>4)</sup>

一九六〇年に、長さや重さ（質量）を含む七つの基本単位、（長さ m（メートル）、質量 kg（キログラム）、時間 s（秒）、電流 A（アンペア）、温度 K（ケルビン）、物質量 mol（モル）、および光度 cd（カンデラ））が国際単位系（SI）として体系化されている（図1、表1）。その定義と、それを技術的に実現する手法は、国際的な委員会である国際度量衡総会（CGPM）で決定されている。この組織の現在の加盟国は五十一カ国で、準加盟国は十七カ国である。日本は加盟国の一員であり、総会への決議案を準備する国際度量衡委員会（CIPM）のメンバー（十八名の有識者から構成）にも産総研から出ている。総会は四年に一度開催され、国際計量標準に関わる重要な決議を行っている。

昨年、二〇一四年の第二十五回国際度量衡総会において、唯一「もの」によって定義されていた質量が、一定の電流による電磁力の変化量から求める方法（ワット・バランス法）または高純度のシリコン球を構成する原子数から求められる方法（アボガドロ法）により決定されることとなった。現在の1 kgの原器の変化量が $50\text{ }\mu\text{g}$ ということは、1億分の5 ( $5 \times 10^{-9}$ )の精度となり、それ以上の正確さでの実験が要求される。世界的な協力と競争により、その精密計測が進められており、1億分の4 ( $4 \times 10^{-9}$ )の相対精度が達成されている。その結果、二〇一八年に開催される次回の国際度量衡総会でキログラムの定義の見直しが

議論される予定である。<sup>6)</sup>

現在、重さに対しても、1 kgを基準とした分量・倍量という手続きで、軽いもののや重いものの測定が行われてきた。そのために、1 kgの定点から離れるほど誤差（不確かさ）が大きくなる。しかし、キログラムの定義改定により、一定の科学技術を有する国であれば、力学量と電磁気量の測定によりマイクログラム以下の正確な評価も可能となる。また、ナノテクノロジーやバイオテクノロジー等の最新科学技術では、原子や分子を一個ずつ操作することが行われているが、その物質量を正確に測ることができるようになり、微小な電子素子、機械素子などの開発や、マイクログラムでの調合が必要な創薬への貢献が期待されている。さらには、市民生活のレベルでも、食品や環境中の有害物質の定量的な検出や、医療現場での遺伝子治療や再生治療における厳密な細胞分取などが可能となる。

私が現在所属している産総研の計量標準総合センターでは、右記の基本七単位の決定や最高精度での計測にかかる研究開発と国際的な連携に加えて、製造現場での品質管理や精密分析のための標準物質の開発と供給も行っている。さらには、公的研究機関として、商い取引や証明に用いられるばかり（例えば、スーパーや小売店にある食料品の「一〇〇グラム・円」のはかり）やメーター（体温計、水道、電気、ガスのメーター、タクシーメーター、ガソリンスタンドの給油機、など）の特定法定計量器（表2）の型式認証（評価）（認証済のものには、「正」のマークがついている）も行っている。最近では、インターネットに接続可能な電力やガスマーティー やタクシーメーターなどの「スマートメーター」の利用が始まっています。それに対応した規格づくりも行っている。

以上、私が関係している計測・計量標準の分野でホットな国際単位系の再定義を中心に述べてきた。このような一般市民の生活や日本の産業の根底を支えている研究業務もあることを知っていたいただきたい。

## 参考文献

1) 八瀬清志、「ふるさとは遠きにありて思うもの」、やまさき文化、98-2 \* No. - 17、Page 17、「一九九八年」

2) 「トコトンやさしい計量の本」今井秀孝監修（二〇〇七年、日刊工業新聞社）  
3) 「万物の尺度を求めて—メートル法を定めた子午線大計測」ケン・オールダー著、吉田三知世訳（二〇〇六年、早川書房）  
4) 「四千万歩の男」井上ひさし（一九九〇年、講談社）（一九九二年、講談社文庫）  
5) 「七つの基本単位」、計量標準総合センターホームページ

<https://www.nmij.jp/info/lab/>

「リレー解説 国際単位系(SI)の体系紹介と最新動向」（第一回～第八回）計測と制御、第五三卷第一号～第八号、一〇一四年



## 著者のプロフィール

1954年12月8日兵庫県宍粟市山崎町鹿沢生まれ  
 1978年 大阪大学 理学部 高分子学科 卒業  
 1980年 大阪大学 大学院 理学研究科 無機及び物理化学専攻 メンター課程 修了  
 1983年 京都大学 大学院 理学研究科 化学専攻 博士後期課程 単位取得退学  
 1983年4月 京都大学 化学研究所 研究生  
 1984年10月 広島大学 生物生産学部 食品物理教室助手(1986年3月 博士(理学)取得)  
 1989年11月～1991年1月 マックスプランク高分子研究所(西ドイツ)留学  
 1991年8月 広島大学 大学院 生物圈科学研究所助教授  
 1992年4月 通商産業省 工業技術院 繊維高分子材料研究所 材料工学部 主任研究員  
 1993年1月 同上 物質工学工業技術研究所 高分子物理部 主任研究員  
 1997年4月 同上 研究室長  
 2000年4月 同上 総務部 産業技術総合研究所 設立準備本部 調査官  
 2001年4月 独立行政法人 産業技術総合研究所 光技術研究部門 副研究部門長  
 2010年4月 同上 ナノシステム研究部門 研究部門長  
 2012年10月 同上 計測・計量標準分野 副研究統括  
 著書  
 「真空中で分子を並べる—有機蒸着膜」稻岡紀子生、八瀬清志(1989年、共立出版)  
 「技術と自然の未来を探る—ナノテクから宇宙まで」八瀬清志、他(2004年、大月書店)

表1. 基本7単位の定義<sup>6)</sup>

量目	単位	定義	採択年
		現示 (科学的根拠、定義に基づく計量標準の実現法)	
長さ	m メートル	単位時間(1秒間)に光が(真空中を)伝わる長さ 波長安定レーザー、光周波数コムなど	1983年
質量	kg キログラム	国際キログラム原器 キログラム原器	1889年
時間	s 秒	セシウム(Cs)133原子の電磁波の周期 セシウム原子時計など	1967・ 1968年
電流	A アンペア	1メートルの間隔におかれた二本の無限に長い金属棒が一定の力を及ぼしあう電流(真空の透磁率) 電圧(ジョセフソン効果電圧標準装置)と抵抗(量子ホール効果抵抗装置)	1948年
温度	K ケルビン	水の三重点の温度の173.16分の1(熱力学温度) 水の三重点セル	1967・ 1968年
物質量	mol モル	0.012 kgの炭素12に存在する原子数 同位体希釈質量分析法、電量分析法、重量分析法、滴定法、凝固点効果法、など	1971年
光度	cd カンデラ	単色光源(周波数 $540 \times 10^{12}$ ヘルツ)の放射の所定の方向での放射強度(1/683ワット/ステラジアン) の光度 極低温電力置換放射計、標準電球、分光視感効率近似受光器、など	1979年

表2. 特定計量器の種類<sup>2)</sup>

1	タクシーメーター	2	質量計	3	温度計
4	皮革面積計	5	体積計	6	流速計
7	密度浮ひょう	8	アネロイド型圧力計	9	流量計
10	熱量計	11	最大需要電力計	12	電力量計
13	無効電力量計	14	照度計	15	騒音計
16	振動レベル計	17	濃度計	18	浮ひょう型比重計

# 第三十六回春の芸能祭ご案内

日時 平成二十七年五月十七日(日)

午前十時から

会場 山崎文化会館  
主催 山崎文化協会・財宍粟市文化振興財団  
後援 神戸新聞社・宍粟市教育委員会・宍粟市

会員の日々の練習の成果を、ぜひご覧くださいますよう、ご案内申しあげます。

参加部門 山崎詩舞道連盟

山崎邦楽の会

宍粟日本舞踊の会  
山崎民謡連合会

さつき民踊グループ

その他宍粟市内より賛助出演



# 二〇一四年を振り返って

山崎植物同好会

伊藤一郎

今年度の活動を振り返って、ご紹介  
かたがた報告します。

四月二十九日西播磨フロンティア  
祭り「出る杭大会」に参加し、野草  
の天ぷらの試食会をしました。会場  
の西播磨県民局の広場では、二〇一  
三年度に本会が実施した氷ノ山登山  
の風景と、山頂周辺の巨木の写真を  
展示し、多くの見学者に我々の活動  
を知らせることができました。



千種町のアスナロ

七月二十六日～二十七日は佐用町  
と千種町の巨木めぐりを開催しまし  
た。佐用町佐用のイチヨウは樹齢約  
千年、とても貴重のある樹です。千  
種町岩野辺字円の元のアスナロは樹  
高一六メートルで県下最大です。し  
かし、樹勢が少し弱っているのが気  
になりました。

九月二十八日には山崎文化協会と  
合同研修会でガーデンミュージアム  
比叡植物園と比叡山寺院見学をしま  
した。植物園は花が咲き誇り、各種  
のダリアやノボタン、バラなどに囲  
まれました。

十月十九日は恒例の国見の森キノ  
コ観察会で講師は鳥越茂先生でした。  
昼食にはキノコ汁を楽しみました。

# 新潮会去年今年

新潮会

宗平圭司

八月	講話「官兵衛に学ぶ」	講師 本会員 鎌田裕明会長
九月	講話「市議会の運営他」	講師 本会員 岸本義明議長
十月	講話「宍粟の教育」	講師 市教委 西岡章寿教育長
十一月	講話「宍粟五〇名山」	講師 名付人 衣笠萬三氏
十二月	忘年会	以上月例会には、毎回九割の会員 が出席しました。

文化活動を軸とした、経済・行政・  
教育の振興に寄与し、併せて会員相  
互の親睦と自己研鑽に努めることを  
めざし、創立より六十余年が経過し  
ました。

先輩諸氏のご尽力による歴史と伝  
統がひしひしと感じられ、より確か  
なものへと伝承していく責務を痛感  
しています。

活動は主に月例会で、平成二十六  
年は次のように開催しました。

一月 新年祝賀会

二月 総会

三月 講話「脳の活性化」  
講師 市役所 谷林眞寿美氏

四月 観桜会・研修旅行 京都滋賀  
講師 市役所 三木善文氏

五月 講話「官兵衛と宍粟」  
講師 神戸新聞社販売部長  
渡辺昭義氏

七月 講話「県警の組織等」  
講師 宮栗警察署 澤義隆署長

一つ、一生懸命なこと。二つ、好  
奇心が旺盛であること。三つ、何に  
でも興味をもつこと。四つ、生活に  
美意識をもつていてことであると…。  
他にも達人の要素は諸々あると思  
いながらも妙に納得してしまいました。  
新潮会にもこの様な達人が、過  
去にも現在にも沢山おられ、学ぶ事  
が多くあります。

創立六十五周年に向け、より一層  
精進してまいりたいものと心を新に  
した新年でした。

# 短歌

## 老を詠う

山崎歌話会 栗山 節子

還暦を過ぎた私は、老境に入った  
(歌の師)に見せたところ、急に不  
機嫌になられ「老の歌を読むのはま  
だ早い、年齢に応じた歌を詠め」と  
きつい叱りを受けた。八十歳の先  
生から見れば何とも小癪な作だった  
に違いない。それからの私は自身の  
老いゆく姿から目を外し、老の歌は  
詠まなかつた。

しかし、八十歳を過ぎた頃より否  
応もなく老が身に沁む日々である。  
「老を詠う」をテーマにした所以で  
ある。

・待つ人があらねばこの世自しが老も  
つぱらかに眺めつゝまるらう

斎藤 史

日々進む老は新鮮な体験ではない  
だろうか。自身の老も丁寧によく眺  
めながら、ゆるりと参りましようと  
詠っている。斎藤史八十四歳の作で  
ある。

- あの坂をのぼって家に帰りたい汽笛がぼーと鳴っている坂
- 歌壇の最長老。家の近くのホームで暮らしていた時の歌で、遺歌集にある。ぼーっと鳴る汽笛に家に帰りたい想を募らせている。そこはかとなく哀愁の漂う作品で好きな歌である。

岡部桂一郎

歌壇の最長老。家の近くのホームで暮らしていた時の歌で、遺歌集にある。ぼーっと鳴る汽笛に家に帰りたい想を募らせている。そこはかとなく哀愁の漂う作品で好きな歌である。

- 歌壇の最長老。家の近くのホームで暮らしていた時の歌で、遺歌集にある。ぼーっと鳴る汽笛に家に帰りたい想を募らせている。そこはかとなく哀愁の漂う作品で好きな歌である。
- さくら花幾春かけて老いゆかん身に水流の音ひびくなり

小中英之

歌壇の最長老。家の近くのホームで暮らしていた時の歌で、遺歌集にある。ぼーっと鳴る汽笛に家に帰りたい想を募らせている。そこはかとなく哀愁の漂う作品で好きな歌である。

作者は昨年十月亡くなつた。最終歌集『水の花』に納められた一首。小中英之への弔歌だが、雨宮雅子はある時期から孤独死を覚悟していたのではないだろうか。

春がめぐり来ると必ず美しい花を見せてくれる桜老樹に、過ぎ去った歳月を重ね凝視している。桜の花に寄せて詠まれた自愛の歌である。

馬場あき子

自死を選ぶ老への警鐘であろうか。心情を率直に詠う姿勢は、衰えを知らぬ。力強い歌で共感を呼ぶ。

清水 房雄

歌壇の先達、長老の作品を見てきたが、まだまだ触れたい歌が多くて心残りである。最後に私に直接短歌のご指導を頂いた二人の先生の老の歌を紹介し、鑑賞したいと思う。

宮 英子

杖に手を置きて憩へるめぐりには音して落葉音なく落葉

藤村 省三

でも「考へてごらん」と居直る強さと氣骨が、長寿の秘訣かも知れない。

忘れさせて呉れる歳月忘れさせて呉れぬ歳月忘れてはならぬ歳

橋本 喜典

山崎の町並みを見おろす最上山は、先生の最も親しまれた散策の山であり、歌の宝庫であった。杖を手に小休止される在りし日の先生が目に浮かぶ。風にさそわれて散る落葉に、人生の終焉を暗示されたと思う。

斎藤 史

淡々と詠まれているが、人生の抒情詩とつくづく思う。

・沢潟おもだかは夏の水面の白き花孤独死をなぜ人はあはれむ

雨宮 雅子

曾孫を囲んでの楽しい賑やかな正月。終わってみれば又静かな二人きりの日々である。その寂しさを「再び笑なき真冬なり」と静かな調べにのせて詠まれている。私の愛唱歌。

- もしかして百まで生きるやも知れぬ雀に言はれてゐるやうな朝
- 「もしかして」と詠まれた百歳もめでたく迎えられた先生であつたが、平成二十四年、百三歳で永眠された。この歌は、雀に托し飄々と口語の柔らかい調べにのせて詠まれている。慎ましいお人柄の滲んだ歌である。
- 西方は十万億土すり足にわれの一世やいま橋掛り能の舞台橋掛りを演者がすり足で去る場面が思い浮かぶ。十万億土は極楽浄土とも言える。信仰心が厚い先生ならではの着眼か。敬虔な老の秀歌である。

稻村 幸子

先日『短歌』十月号に「一日一日はたからもの」という見出いで、百三歳、渡辺つぎさんの写真と短歌が

曾孫去にて正月過ぎてわがめぐり出でていた。

渡辺 つぎ

私ももう少し生かされて、自在に老の歌を詠みたいと思つてゐる。



俳

句

かれとなく声も弾んで、楽しそう。

処々にある先師の句碑に脚を止めながら文字をなぞり散策する。

うす紅葉詩碑句碑多き聚遠亭

### 青嶺句会詠草

さわらび句会詠草

花吹雪幸浴ぶごとく刻惜しむ

壇阪加代子

・疊りの飛び交う狭庭賑やかに  
大谷 延子

・杜奥となりて疊りふるごとし

本條 淑子

・遠き日の軍歌は哀し若桜

藤井 七代

・三極の花咲きのぼり花明り

川崎 栄子

・寄る窓辺日射明るく楓の芽

小林 紫生

・金婚の式典恙に青葉中

角野 桂治郎

・呼応して高く低くに疊れり

重田 陽子

・蓮華田に埋れ野遊びする子達

秋久 光子

・明月や稜線確と冴えわたり

秋久 光子

・疊りや今は廃れし登り窓

秋久 光子

・春眠の客を鏡に理髪店

秋久 光子

・少年の瞳の先に蝌蚪生まる

秋久 光子

・石垣に歴史を刻み月朧

秋久 光子

・手すさびの刺繡に和む冬籠

秋久 光子

・ずんぐりもすらりも美味し秋茄子

秋久 光子

・薄紅葉露風の歌碑のひっそりと

秋久 光子

・春の街に柳芽吹きて小糠雨

秋久 光子

・大輪の牡丹の崩れなみだ雨

秋久 光子

・再びの逢うすべもなく沙羅の花

秋久 光子

・花あやめ二度とまみえぬ黄泉の旅

秋久 光子

・瑠璃深し龍野の里の初紅葉

秋久 光子

・足に来ていた。手づくりのお弁当を広げ、たのしそう。

秋久 光子

・どんぐりや園児ころころ駆けてゆ

秋久 光子

・昨夜の雨も上がり、子ども達が遠

秋久 光子

・足に来ていた。手づくりのお弁当を広げ、たのしそう。

秋久 光子

・薄紅葉小さき獣園児らの声

秋久 光子

・成す事を先送りして秋深む

秋久 光子

・門川の細き流れも秋の水

秋久 光子

・ゲリラ雨去つて秋の種を蒔く

秋久 光子

・成す事を先送りして秋深む

秋久 光子

・幸子

秋久 光子

・今年も楽しく和やかに終えた吟行

秋久 光子

・秋の釣瓶落しに少々氣を急かされる

秋久 光子

・すばらしい小春日和を賜り、だれ

秋久 光子

### 五色しそう句会詠草

「句友 井口泰子さんを悼みて」

(平成一十六年五月逝去)

・湯の街に柳芽吹きて小糠雨

秋久 光子

・轟りの歡喜こぼるる大樹より

秋久 光子

・成す事を先送りして秋深む

秋久 光子

・面影の優雅と偲ぶ花菖蒲

秋久 光子

・再びの逢うすべもなく沙羅の花

秋久 光子

・花あやめ二度とまみえぬ黄泉の旅

秋久 光子

・瑠璃深し龍野の里の初紅葉

秋久 光子

・足に来ていた。手づくりのお弁当を広げ、たのしそう。

秋久 光子

・どんぐりや園児ころころ駆けてゆ

秋久 光子

・昨夜の雨も上がり、子ども達が遠

秋久 光子

・足に来ていた。手づくりのお弁当を広げ、たのしそう。

秋久 光子

・幸子

秋久 光子

・成す事を先送りして秋深む

秋久 光子

・門川の細き流れも秋の水

秋久 光子

・ゲリラ雨去つて秋の種を蒔く

秋久 光子

・幸子

秋久 光子

・成す事を先送りして秋深む

秋久 光子

・幸子

・幸子

・幸子

秋久 光子

・幸子

・幸子

・幸子

秋久 光子

・幸子

・幸子

・幸子

秋久 光子

・幸子

・幸子

・幸子

秋久 光子

・幸子

・幸子

・幸子

秋久 光子

・幸子

・幸子

・幸子

秋久 光子

・幸子

・幸子

・幸子

秋久 光子

・幸子

・卯月風君乗り給う弥陀の雲

三浦 雪

・シャボン玉ひとつは泪夢の中

笠原 了

・もう一度と逢えぬ別れや五月雨

富井 幸子

・今頃は渡り給うか蓮の池

重田 陽子

・淨土への旅路を照らせ夏至の月

秋久 光子

・面影を又夢に見る夜のみじか

三浦 雪

・思い出の尽きぬよわいや著莪の雨

福元 敦子

・雪の中恩師訪ねて児に返り

谷口 昭子

・綿虫の命ただよふ空の色

宇野 幸子

・廃屋に今年も咲きし梅の花

清水 省三

・目覚めゆく町を搖さぶる虎落笛

鳥羽チエノ

・立春の鬼の棲みつく身となりぬ

松本 壽子

・月光を浴びて解けし農疲れ

西田 宣子

・今日明日のいのちを声に秋の蝉

浅田 薫耕

・万両や苔の褥に凜として

三浦 ゆき

・つくばひに松葉折り込む厚水

重田 陽子

・天地の荒るる惑星木の葉舟

田中 慶英

・淨土への旅路を照らせ夏至の月

秋久 光子

・面影を又夢に見る夜のみじか

三浦 雪

・思い出の尽きぬよわいや著莪の雨

福元 敦子

・雪の中恩師訪ねて児に返り

谷口 昭子

・綿虫の命ただよふ空の色

宇野 幸子

・廃屋に今年も咲きし梅の花

清水 省三

・目覚めゆく町を搖さぶる虎落笛

鳥羽チエノ

・立春の鬼の棲みつく身となりぬ

松本 壽子

・月光を浴びて解けし農疲れ

西田 宣子

・吾が植えし紅葉二十歳彩盛る

橋本 昭子

・思い出はあの日のままに冬帽子

小田 朝子

・古代より美しき姫の神有月

速水美知代

・薄ごおり触れて竹馬の友笑う

平形 照美

・再会も一會も同じ春の雪

前野 徳子

・山崎みやこ句会詠草

宗平 圭司

・何もかも土に帰りて冬支度

金山 英子

・寒菊や母の忌日の願い事

坂井 恵子

・星降り言葉呑み込む冬の空

坂井 久栄

・六人の魂だきて雪の木曾

坂井 久栄

・杵音の消えて久しき餅搗きす

坂井 恵子

・孫飛んで鞠飛んで来し夕日向

坂井 久栄

・車椅子止めて落葉に語ること

坂井 久栄

・茶の花を活けてしづまる奥座敷

竹添寿美子

・初日影山にかえりて鄙の里

土井 洋美

・慈なき迎える春の陽の和し

速水美知代

・落葉舞ふ高屋の杜の大銀杏

萩原 恵子

・なつかしきアルバム眺め日向ぼこ

矢野登次郎

## しそう筆ゆり句会詠草

・英靈の荒野の風や菊供ふ

・枝打てば日の落とし子や杣明り

・昏れ残る軒三軒の懸大根

・初曆掛けて予定の筆新た

・谷口 景子



## 思い返して

山崎聞碁同好会（守拙会）

井 原 嗣 治

趣味を挙げれば、囲碁やカラオケ等かと思う。古いの暇をまぎらしている。本職は石工業で中学校卒業後父親のもと、仕事を習い初めて六十余年の歳月が流れた。当時は一日働いて百五十円程の日当であつたと思う。昭和二十六年のことゆえ、時の流れの恐ろしさというか素晴らしさを今に想う。当時は石碑に文字を彫るときに、ほとんどの方が六十歳までに他界されていた。たまに、長生きされた方の原稿を頂くと間違いとちがうかと尋ねに行つたものだ。それが現在は高齢化社会で、八十歳以上の方がほとんどで、逆に若くして亡くなられた方などがあると間違いではないかと聞きに行くことである。元気で長生きバンザイである。

仕事をさせていただく上でも随分と変わってきて、若い頃は、仕事の始まりは朝五時より火を起こし、ふいごでその日に使う石ハツリ用のノミを修理する。要するに鍛冶屋仕事をから始まり、石工以外の仕事を習う必要があって、どちらも一人前にな

らなければならなかつた。でも、世の中ありがたいもので、近代化の波と共にノミなど焼かなくても合金製の道具ができる、よく切れで楽になつたと思っていたところ、なお、便利なダイヤ工具と言うものができるようになり、仕事は速いし、仕上がりはきれいだし、本当に楽になったものだ。

ところが、あまりにも速くなつたものだから大量生産ができるようになり、そのために現在では以前のような仕事の量がなく、今は我々業界もご多分にもれず不況である。とまれ、古き良き時代に仕事をさせていただいたものだと感謝の気持ちでいっぱいである。

あの余生は、好きな囲碁やカラオケで過ごすつもりである。囲碁を習ったのは、仕事と同じ時期で、六十年前に三日間指導を受けたのが始まりとなり、今ではいちばん怖いボケ防止の役に立つかと思い、多くの仲間の方々に助けられながら楽しんでいる。

どうですか、皆様も、ボケ防止の一助に習つてみてはいかがでしょうか。一度きりの人生、元気で長生きがいちばん。生涯に悔いを残さないためにも心も体も元気でありたいと思うばかりです。

## 豊かな国

宍粟茶華道協会

三 谷 香 苗

年が明けて、平成二十七年の幕が開いたと思ったら、いきなりの大雪で、外へも出かけられず、家でテレビを見ていると、どの局もバラエティ花盛りで、特にグルメ・旅行の番組を延々と流しており、つくづく日本は平和で豊かだなあと改めて感心するに同時に、果たしてこれで良いのかと複雑な思いになりました。

新聞テレビのメディアは、アベノミクスは失敗ではないのかとか、円安で中小企業は大打撃をうけて大変なことになるとか、輸入原材料の高騰で物価が上がり生活はもっと苦しくなるとか、盛んに不安を煽っています。でも新幹線や高速道路は帰省の人と車でごった返し、空港は海外で正月を過ごす人たちでいっぱいです。お金がないと口では言いながら、外食産業は家族連れで大賑わいでです。

ただ、私はこの豊かで平和な日本の正月が、将来も間違いなく毎年巡ってくるのだろうかと不安に思う事があります。それは、次代を担う若い人たちの道徳観や倫理観に疑問を覚

え、今までの当たり前のモラルが通用しなくなるのではないかと思うことがあります。特に本や新聞を読むことなく、ゲームやスマホに明け暮れるあまり、人とコミュニケーションが出来ない、言葉遣いを知らない人が多いのが気になります。礼儀・思いやり・謙虚さ・我慢・言葉遣い、品格を高め、ひいては世界に尊敬される国として生き残る大きな力になると思うのですがいかがでしょうか。

茶道・華道は“しきたり”を学ぶものと思われがちですが、同時に言葉遣いや人に対する思いやり・謙虚さ・我慢強さなどの訓練の場所でもあると思います。日本の歴史に培われた伝統文化である茶道・華道を通じて、若い人たちが少しでもこのことに気がついてくれればと思っています。話が少し大袈裟になつたかもしませんが、氣負うことなく自然に学んでほしいなと、そんな事を思つたお正月でした。



## 川戸獅子舞 保存会のこと

山崎郷土芸能保存会

原 弘 幸

お盆が過ぎて秋の気配が近づくと、夜な夜な公民館から笛や太鼓の音が聞こえ始める。川戸獅子保存会の練習は毎年八月の下旬から始まって週に二、三回のペースで十月上旬の岩田神社の秋祭りまで続く。

演目は七つ。「剣の舞」から始まって「やしまい」「ほら返し」「じやんぎり」「まり」「油買い」「みちびき」と続く。獅子を舞わすのは二〇代～三〇代の若手が中心で、お歴々の先輩方がその指導に当る。その中で口をすっぱくして伝えることがある。「川戸の獅子は“かえし”が命」。

“かえし”とは獅子が頭をくねらせて顔の向きを変える動きのことだ。これが上手く決まると、獅子が一点を睨みつけているような迫力が出る。木彫りの頭に命が宿る。

マニュアルがあるわけではないので指導は全て口伝だ。時には厳しい言葉も飛ぶ。「指導者によつて言うことが違う。」と若者が愚痴るのは、

もはや毎年の約束だ。

派手さはないが、シンプルな動きで美しさを表現する。そんな日本的な氣質がこの獅子はある。シンプルであるがゆえに奥が深く、舞わし手は自分の獅子を求めて腐心する。

一日の仕事を終えてから練習に参加するのはときには億劫で、体力的にも楽ではないが、そんな苦労を楽しいと感じられるのは、やはり共に精進する仲間が居るからだろう。練習の後はみんなで輪になつて、ビールを酌み交わしながら獅子舞談義に花が咲く。

祭りの当日、川戸の獅子には子供達も着飾つて「子役」として登場する。一生懸命に練習した舞を獅子と一緒には披露すると、おじいさん、おばあさん達は目じりを下げ、お母さんは正装姿でビデオを構える。まさに主役を食つてしまふ名役者達だ。

うららかな秋の日差しの中、境内のあちこちで笑顔の花が咲く。老いも若きも男も女も、懐かしいお里帰りの姿も見える。

祭りが終わると秋は一気に深まり、あつという間に正月がやって来る。すっかり日常に戻った暮らしの中で、例えは公民館の前を通るときに、ふと笛の音や仲間の笑顔を思い出したりする。

## コーラスとの 出会い

山崎町民合唱

黒田玲子

十一月三日には、文化のつどいに

参加させて頂き、話題曲「アナと女王」にチャレンジ。発表会に至るまでは、練習を積み重ね、当日はみんなの歌に対する情熱と努力で、気持ちよく歌うことができました。後で知ったのですが、このグループは、山崎町の歴史ある町民合唱でした。歌うこと樂しみながら美しいハーモニーをめざし、練習に参加されていました。

歌の練習の合い間の休憩の時間も楽しみです。なにげない会話の中には、得る所がたくさんあり、いろいろ人生勉強をさせてもらいました。歌を合わせる樂しみ、人との出会いが今の私の樂しみの一つになっています。

みなさんと出会えて本当によかったですと思っています。これからもよろしくお願ひします。



# 古代の先進地

## 宍禾の郡

昭和会 清水省三

『播磨国風土記』の中で大国主命（葦原志許平命）がいちばん活躍したのが、宍禾郡であり、伊和大神（以下「大神」という。）の伝承が十二例と最も多く、担保・讃容（佐用）の郡でも五例と少ない。大神は周辺に信仰を伸ばし、姫路の手柄山西南部の地域も伊和部と言われた。次に延喜式内社について記したい。

西暦九二七年醍醐天皇の命により、延喜式が撰上され、神名帳に全国の神社が式内社と記載された。宍禾郡には大一座、小六座の七社が記載されている。

（一）伊和神社（伊和坐大名持御魂神社、一宮町須行名）

式内社の中での社格の高い名神大社であり、境内の一万七千坪には巨木が繁っている。正一位国幣中社で、五六四年に創祀され、大己貴神（大国主命）が祀られている。風土記にも大神が國作りを終え「おわ、我がみきに等し」と申され、ここに鎮まつたと記述されている。鶴石伝説（白鶴二羽が石の上で北向きに眠つた。）により、社殿は北向きにある。（二）御形神社（本殿重要文化財、一宮

町森添）

この地黒土志爾嵩（高峰山）で葦原志許平命と新羅王子天日槍命が黒葛を三条ずつ投げ天日槍命のは三条とも但馬の出石に落ち、志許乎命のは但馬氣多郡、夜夫郡と御形の里に落ちた。大神が形見として槇の御杖を刺し植え、占拠の標とされた故に御形といわれた。奈良朝の宝龜三年（七七二）頃、村人数名が一夜の内に三本の大杉が現れた夢を見たので、大神を当地に移し社殿を造営した。

祭神は葦原志許平命とし、天日槍神も配祀している。本殿は室町後期の彫刻組物で見事な彩色である。

（三）庭田神社（日本酒発祥の地、一宮町能倉）

祭神は事代主命とされるが、元は伊和大神とされる。風土記に「大神の御糧（ねぐら）沾（ぬ）れて稻（いな）生（う）えき。酒を醸（く）さしめて庭酒（にわざけ）に献（さ）り宴（うたげ）しき」とある。大国主命が国土経営の争い終わり大事業達成に力を合わせた神々を招き慰労の饗宴をされたとある。

御鎮座は十三代成務天皇の御代とされる。

（四）雨祈神社（貴布祢神社、山崎町千本屋）

祈雨止雨の神と信仰され、境内の砂は蝮除けになるとされる。

（五）與比神社（伊和三社、山崎町与位）

祭神は、素佐之男命（大倭物代主神社）（諸守大明神、

山崎町下牧谷）

祭神は大物主神、事代主神

（七）邇志神社（波賀町皆木）

祭神は稻若螺明神。伊和大神の妃

## 絵とわたし

山崎美術協会 前井かずや

山崎美術協会の展覧会などがある時、私はガレージにビラを貼つたり

「今、展覧会をしてるで」とか「また見てね」と近所の人に声をかけたりしています。

そして、山崎美術協会の役員になつた関係もあって、作品を作るだけではなく、パネルを立てたり、作品をつるしたりして、また展覧会場を作つたりした時など「見てきたで」とか「よかったです」「今度、また展覧会が開かれたで」などといわれる、私にとっては最高の喜びになります。

人とのお付き合いの下手な私は、ある時教えてななどといわれる、私にとっては最高の喜びになります。

私が絵を習い初めてから早いもので、もう二十年になります。私が絵を描けば描くほど好きになりました。その上、主人までが木工作業で、絵を描くパネルを作つたり額縁を作つたりして応援をしてくれるのです。

今では、なんでもない道端の草の色が気になつたり、木の葉の色が見えます。いつまでも元気で絵が描けたらと願うばかりです。

# さつき民踊さん達があつての私

さつき民踊グループ 福原良子

これお願ひしますと、原稿用紙を渡されて、お断りしたのですが順番と言われて引き受けてしまいました。何を書いていいのか迷いましたが、私のことを少し書かせていただくことにしました。

光陰矢の如く、さつき民踊さんの仲間に入れていただきて、十年が過ぎてしましました。覚えは悪く、忘れることが多くなりました。気力も体力も低下しだして、こんなに年がいくとは思っていませんでした。人ごとのように思っていたのに……。自分がなるとは……。

二年前の秋の芸能祭の二日前に緊急入院になってしまい、寿賀幸先生とさつき民踊の皆さんにご心配とご迷惑をかけてしまいました。それから、入退院の繰り返しですが、今はだいぶん元気になり、気力も徐々に出てきました。これも先生やさつき民踊の人たちのおかげです。皆さんがいつも声をかけに来てくださつ

たり、電話してくださって、私も自分のしんどいことをぐちって、聞いていただくことでストレス解消になりました。また、何もしなくてもいいから、みんなの顔を見てお話ししましょうと声を掛けられて練習に行き、少し踊ると仲間の人たちが、「大丈夫か。休んどきな。」と優しく

気遣ってくださり、練習日が張り合いになって、練習に行くことが私の元気の元だと思っています。

これも、さつき民踊の仲間にしていただいたおかげです。まだまだご心配とご迷惑をかけますが、もう少し仲間にしていただき、頑張ろうと思っています。

寿賀幸先生、

さつき民踊の皆さん本当に有難うござります。



# 楽しいお稽古日

山崎日本舞踊の会（春陽会）

井口定子

「お願いします。」とお互いに挨拶し、私たちの稽古が始まります。稽古をつけてくださるのは、日本舞踊坂東流坂東寿賀幸師匠です。立ち

上がり扇子を構えた瞬間、緊張の一瞬です。やがて曲が始まると、前へ

二、三歩進んだとたん、テープをカチンと止められた寿賀幸師匠から「その足の運びあかんワ。足先に気をつけて。」と厳しい声、今までの優しさはどこへやら、一回の稽古で何回も止められる厳しさ。でもこの厳しさに幸せを感じ、心に潤いをも

らっているのです。絶対に安易な遊び氣分は許されないのですね。私や私の仲間の澄子さんも、嫌な言葉の後期高齢者と言ふ部類になつた今も、稽古日を楽しみに頑張っているのです。

私たちまだ当分、この厳しさ、うまく表現できないもどかしさの中に浸つていて、と思います。それが私たちを支え、元気付けてくれる源だと信じているからです。澄子さんから「残念やわ。もうちょっと前までは体が思うように動いていたのにナー。」との声。本当、もう少し前までは、二人とも頑張って芸能に控室へお伺いすると、皆さん笑顔で迎えてくださいます。その笑顔にホッと安堵したり、また、反省させられたりしている現在です。

今は、観客席に座り、いろいろ感動したり、チヨッピリ批評してみたり、また、お客様のひそひそ話に耳をそばだてたりしています。その中で、観客の方の目が肥えてきておられるのに驚く時があります。と言うことは私たちも、一つ一つの動きにも真剣に取り組み、日頃から自分に満足のいく稽古を積み重ねることが大切なのですね。

春陽会に籍を置くおかげで、まだ夢を追うことができたり、稽古に励むことが楽しかったりしていますが、発表に参加するなどおぼつかない状態です。今ご活躍くださっている皆様の益々のご研鑽、ご精進されますことをお祈りし、多くの先輩の方々が残された、この伝統ある舞踊を益々盛り上げてくださることを影ながら願うものでございます。

前までは体が思うように動いていたものでした。今でも幕開きの前に控室へお伺いすると、皆さん笑顔で迎えてくださいます。その笑顔にホッと安堵したり、また、反省させられたりしている現在です。

今は、観客席に座り、いろいろ感動したり、チヨッピリ批評してみたり、また、お客様のひそひそ話に耳をそばだてたりしています。その中で、観客の方の目が肥えてきておられるのに驚く時があります。と言うことは私たちも、一つ一つの動きにも真剣に取り組み、日頃から自分に満足のいく稽古を積み重ねることが大切なのですね。

春陽会に籍を置くおかげで、まだ夢を追うことができたり、稽古に励むことが楽しかったりしていますが、発表に参加するなどおぼつかない状態です。今ご活躍くださっている皆様の益々のご研鑽、ご精進されますことをお祈りし、多くの先輩の方々が残された、この伝統ある舞踊を益々盛り上げてくださることを影ながら願うものでございます。

# 詩吟との出会い

山崎詩舞道連盟  
紫洲流 日本明吟会

総師範 猶原紫秀

昭和二十九年 高校生の時、体育の時間にK先生が「不識庵機山を擊つの図に題す」を吟じながら剣舞をされました。詩吟とは良いものだと痛感し、やってみたいと思いつながら年月が過ぎて行きました。

これまで私は扁桃腺をはらし毎年苦しんでおりました。医師である兄に相談したところ、手術をすることも喉（扁桃腺）を強くすること、それには詩吟がよいのではと云われました。それから数年後、昭和三十八年十月一日より紫洲流明吟会大師範梅内紫蓉先生の弟子となり四、五年は詩吟が上手になることよりも、喉を強くすることを心掛け練習をしました。その結果詩吟を始めてから今日まで扁桃腺で苦しむことがなくなりました。

紫洲流明吟会は、昭和八年に大日本明吟会として設立、兵庫明吟会としては昭和十三年、宗家秦紫洲先生が産業会で働く青少年の文化の高揚

のため始められました。昭和三十八年には梅内先生が西播で活躍され、一時は五百名余りの会員がいました。私が詩吟を続けていてよかったです。おられる方に、发声練習から始め二年三年で話しができるようになり喜

こられた事、又、兵庫県吟權者決定大会に於て少年の部と青年の部で優勝者を出した事です。その内の一人の感想もつけ加えます。

## 詩吟を始めた動機

紫洲流日本明吟会

森本里沙

私が幼稚園の頃、おばあちゃんと一緒によくお風呂に入り大きな声を出し合い、金州城を歌っていました。そのうちおばあちゃんについて道場に通い始めました。：中略：

これまで心に残ることはたくさんある中で、一番は紫洲流全国大会で熊本に行き、コンクールで優勝した事です。

最後に私自身詩吟をやって良かった事は、風邪をひかなくなつた事、扁桃腺で苦しまなくなつた事です。

紫洲流明吟会は、昭和八年に大日本明吟会として設立、兵庫明吟会としては昭和十三年、宗家秦紫洲先生が産業会で働く青少年の文化の高揚

# 大好きな和太鼓

宍粟和太鼓アーツ俱楽部

内海遊大

僕は和太鼓を始めて約五年が経ちました。和太鼓を始めようと思ったきっかけは小さい頃、自治会で行っている祭りで中学生の人たちが和太鼓を叩いている姿がカッコよく、自分もあんな風に叩きたいと思つたからです。小学四年生の時、和太鼓アーツ俱楽部の水曜子ども教室に入りました。水曜子ども教室は、その頃小学校高学年が入れる教室で、僕は高学年になつたばかりで他の子についていくか不安でした。でも家で練習していくうちに皆と同じように叩けるようになりました。そのため覚える曲、覚えることが一段と増えました。

今年からは、僕は倭童子のリーダーになつたこともあり、チームを引張つたり、頑張らないといけないことがより増えました。ですが、自分一人ではできない所があり、仲間や家族に支えてもらっています。いろんな人に支えてもらつてることを忘れず、一回一回の練習、出演を大切にしていき、演奏をみている人を元気づけるような演奏者になりたいです。

二年目のフェスティバルはもう一

つ上のクラスで、中学生中心の「倭童子」に入り演奏しました。二回目

やまきまち歩き  
ガイドの会とその  
活動について

山崎郷土研究会

坂本忠彦

歴史的な観光資源を持っている地区では、ボランティアガイドが活躍しています。まして観光立市を目指す宍粟市にとってボランティアガイドは不可欠であり、平成二十五年は山崎郷土研究会とやまさき文化大学歴史探訪講座の全講師が中心となりまち歩きガイドの会発足に向け頑張ってきました。六回の打ち合わせと十月十六日の視察研修、小野市、加西市に行きボランティアガイドから現地の案内の仕方、ガイドの心得等学んできました。

発足してからのガイド状況は、六月十四日の県立大学環境人間学部の三十八名に始まり、七月二回、八月一回、九月一回、十月二回、十一月四回、十二月二回、合計十三回、三百五名の案内をしてまいりました。但し、藤祭り、もみじ祭りの自主活動は含んでいません。

時代の流れを想う

山崎邦楽の会

伝統文化の継承は、維持のむずかしいものだと思います。世相の移り

の文化の一部が衰退しないかと考えると、さみしい気がします。それは私が思っているのですが、そ  
うならないために、新人の養成に努力しないと駄目になる。やはり努力不足だったと思いませんが、発展の一  
つの試案として、小規模でも発表する場所と機会を、多く持つことが大切かと思います。



「軍師官兵衛」が登場してきました。まさに今ですよ!!今やらなければガイドの会は出来ません。行政と共に決意を新にし、五月一日、「やままたきまち歩きガイドの会」を発足させました。設立総会として規約、役員選出、事業計画及び収支予算について討議、神戸新聞にも掲載されまし

↓篠ノ丸城跡↓八幡神社↓山陽孟酒造・老松酒造↓紙屋門↓歴史郷土館  
↓光泉寺↓夢公園と帰ってきました。  
NHKの内藤アナウンサーも気さくな人で楽しい会話が出来ました。

二十七年は大河ドラマも宍粟市には関係なく、これから、いかに市外から来てもらえるか、交流人口が増えていくか、いろんな仕掛けづくりも考えながら研修もし、宍粟市ならではの「おもてなし」をし、お客様がまた来たいと思ひながら帰っていただけるよう心掛けて、受け入れていきます。

のか。また社会人となっている人でも、尺八道って何のことですか。尺八など見たこともない。とおっしゃる人もあるのには、全く驚きました。芸能の世界も多種多様で、邦楽のようなテンポは今の若い人には受け入れにくいのかとも思われます。

まことに残念なことですが、新人が育たなければ、途中で途切れてしまう憂目をみるのは当然です。日本

## 平成会の恒例事業と年間テーマ

平成会  
高野吉則



## 母に勧められて感謝！

山崎民謡連合会  
日本民謡やまっ子会  
石田陽子

遠のテーマである事に気付きました。私自身が今しているのは、薬による強制的な数値の「コントロール」です。そして、出来るだけ努力しているのは食事とアルコールの量だけです。それでも医師から言われました。「六十歳から気付いて努力する」と努力しないのでは、人生の着陸地点に大きな違いがある。」その言葉を信じて出来るだけ遠くまで飛行できるように努力したいと思います。

平成会も約三十名の平均年齢が六

十歳くらいになります。残念ながら二年続けて大切な仲間を失いました。

予定通りの着陸地点まで飛行できる

よう、強制的に「コントロール」されるのでなく、各自が出来るだけ努力して「コントロール」するよう心がけて、平成会の活動がいつまでも地域の皆様のお役に立てたらと思

い申上げます。

平成会の会長は一月の総会で決定し、会長は毎年その年のテーマを掲げます。私が本年掲げたテーマは

「コントロール」でした。高校時代

の部活では、これに随分悩んできましたが、辞書には制御、操作、支配、

管理、規制、抑制、統制とあります。正に人生の設計図です。そして、その全てが出来なくて当たり前、いや出来るだけ出来るように努力する永



記念発表会を予定しております。早や十九年、来年七月には第二十回記念発表会を予定しております。

日本民謡やまっ子会を結成して、早や十九年、来年七月には第二十回記念発表会を予定しております。

日本民謡連合会  
日本民謡やまっ子会  
石田陽子

まに弾いていました。私は褒められて育つ方なのか、「上手ですね。」と拍手された時はうれしかったです。一方で「その三味線、何とかならないのか。」ときつく言われて、悔しい思いをしたこともあります。辛かったことを今でも覚えています。「なにくそ。」と思い直して頑張ってきました。

民謡歴は三十年です。何とか次世代に受け継がれるように、若い人に覚えてほしいと思うのですが、なかなか興味を持っていただけないのが現状です。

いろいろなイベントに参加したり、老人ホームや病院などから声がかかれば、時間の許す限り、どんどん出て行って、皆さんに聴いていただこうと思っています。いつまで頑張れるか分かりませんが、ボケないよう毎日忙しい中でも続けていこうと思います。たくさん仲間がいると云うことは幸福なことです。

練習は山崎町上比地、安富町ネスパル、波賀教室、千種教室などで続けています。いつでも気軽に覗いてみてください。三味線も興味のある方は各教室でやっております。

## 歌舞伎と能楽

山崎謡曲同好会

三 谷 恭 三

私は、この山崎に生まれてはや六年を過ぎるが、最初に謡曲を聴きかじったのはおそらく幼稚園の頃だったのではないかと思う。その頃一緒に住んでいた母方の祖母（友澤光ゑ）が、座敷で謡曲を開いて細い声で謡っていたのが遠い記憶に残っている。その頃は、ここ山崎にも大阪から大西信彦先生（観世流シテ方）や姫路から江崎正左衛門先生（福王流ワキ方）をはじめ、離子方を含めて多くの先生方が定期的に来られて、謡曲・仕舞・鼓などを教授しておられた。時には上寺の池田製瓦さんの能舞台や、鹿沢にあった下村記念館で能や舞離子・謡曲の会が催行され、今思えばこの地方にも実に優雅で趣のある時代があったものだと思う。もちろんそのためには、多くのこの地の先人たちの努力もあり、謡曲の同好の方々も大変多くおられたことが、その支えになっていた。

話を戻すが、この正月テレビで今をときめく市川海老蔵のドキュメント番組があつたので何気なく見ていると、かの海老蔵が「歌舞伎が世界無形文化遺産に登録されたということは、ある意味で絶滅危惧種の芸能だと指定されたのと同じことだと思っている」と言っていた。克服するためには自身が頑張って“世界の歌舞伎”にしなければ、と言っていたのが印象的であり考え方された。能楽は、歌舞伎に比べて歴史も遙かに古いかが、その世界無形文化遺産の登録も五年も早く、日本で一番目の指定となっている。つまり絶滅危惧の心配がそれだけ重篤と言うことではないか。

今、歌舞伎は昔と違つて多くの若い人たちが劇場を訪れ大変な人気を博しており、役者もベテランから若手まで多くがテレビや映画でも活躍をしている。このことを能楽の世界にも実現しなければ、日本が世界に誇る伝統芸能である能楽はやがて絶滅してしまうのではないかと心配をしているのは私一人ではないと思うのだが。

## 川柳破丸会

清 水 省 三

毎月一回集つてお互いの句を肴に樂しくやつております。今年中に二百余回を迎える。メンバーも増えており、氣の置けない楽しい会です。氣楽に見学をして下さい。

この歳で どこぞないかな 玉の輿嫁行かず 出す事ばかり お年玉セーターで できた毛玉で 遊ぶ猫

若いねと 言われて帽子 脱げません美容院 後ろ姿は 若返り 内緒ごと 相手はすでに 知っていた織金 和敬

愛車とも 返納まだまだ 今八十路ひま潰し あぶない勧誘 聞いてみる何でかな 同じ食事で 夫ほそ身 是兼芽吹

果物も 早く実になる 近代化ホタルより 我が家の シェフは 安心だ勧誘の 電話の向こうは 美人声志水 亀の子

不器用な とこだけ似て いる 健さんとスッポンが 勝負しないと 月に言うおばあちゃん 今日も元気で 病院へ八十路 下り坂も また樂し

谷口 柳幸

冷え性で たけのこみたいに 重ね着し  
メモ用紙 捜している間に 用忘れ  
記念にと 残した写真 今は邪魔  
ちぐはぐな 反事で進む 電話口  
生きてやる 鼠一匹 居ぬ家で  
田中 万来

玉手箱 開けた覚えは ありません  
ソーラーの 時計に追いつかぬ 二の頭  
年寄りも それ位なら 知っている  
年齢で 理解の仕方 みな違う  
谷川 そよ風

叱られる 気配感じた 子らは消え  
不都合は 認知のふりする 老いの知恵  
高台の 親の墓前で 膝笑う  
千本 風筅

から元気 出して後から 寝込んでる  
小姑は 時々顔出し 世話は嫁  
うしろから なぜか感じる 冷たい目  
千本 花夢

怖い夏 热射病より 電気代  
きめ言葉 知らんわからん 聞いとらん  
褒め言葉 ケドナの後が 気に掛り

出世せず 昔何クソ 今気楽

返品し 店員さんに 礼言われ  
ネックレス 昔ダイヤで 今は磁気  
中居 絵師

坂東 笑雅

目も耳も 不自由になり 口達者  
嫁はんに 辛いが孫に 甘い顔  
八十路 下り坂も また樂し

清水 三省

# 私 絵を描く

ターンアートクラブ  
志水和司

原稿依頼をうけ、困ったなあと思  
いながら、ここ二週間ほど悩んでい  
ました。でも期日がせまる中、自分  
の絵への思いや考えをつたなくはあ  
りますが自分の経験などから書こう  
と思います。

私が油彩画にあつたのは十八歳  
の学生の時でした。ですから今では  
四十年近くつきあつてきましたことにな  
ります。はじめは楽しくて三畳の下  
宿先で夜中まで描いていて、下宿の  
おばさんによく「はやく寝なさい」  
と叱られました。途中、中学校に勤  
めるようになり朝から晩まで勉強と  
部活動で手一杯でおろそかになって  
いましたが、一昨年、絵に専念する  
ことにしました。

昨年は、金沢の「ギャラリーひろ  
た」さんで二人展、大阪淀屋橋の  
「ギャラリー大井」さんでグループ  
展をさせていただきました。金沢で  
は、二紀会の西山さん、高橋さん、

お寺さんで山崎出身の松井淑生さん  
も泊まつていかれたとか言っておら  
れました。大阪では、池田義則さん、  
吉田伊佐さんはじめ白日会の皆さん  
と普段話せないような有意義な会話  
ができました。それぞれプロの絵描  
きとして活躍しておられる方々で取  
り組みの厳しさを改めて感じること  
ができました。

私は今、人物画を描いております。

はじめは形がそれなくて、形がそれ  
くなるようになると次は肌の色が出せな  
くて悩みました。肌の色がそこそこ  
ごまかせるようになると、肌や衣類  
とその隣に来る色の関係に悩み、陰  
の色に悩みと悩みはつきませんでし  
た。

ようやくそれらしいものができる  
ようになると（実際は、まだまだ描  
けませんが）、次は、その人の持つ  
臭いや想い、自分がその人で何を表  
現してもうおうとしているのかが気  
になり出しました。尽くるところは  
ないようです。ただ、先輩方（例え  
ば白日会の生島浩さんや木原和敏さ



題名：八月

春陽会の西房さんにお会いし、そ

れぞれの絵に対する思いを聴かせて  
いただき絵描きとしての参考になり  
ました。ちなみに西山さんのお家は  
お寺さんで山崎出身の松井淑生さん  
も泊まつていかれたとか言っておら  
れました。大阪では、池田義則さん、  
吉田伊佐さんはじめ白日会の皆さん  
と普段話せないような有意義な会話  
ができました。それぞれプロの絵描  
きとして活躍しておられる方々で取  
り組みの厳しさを改めて感じること  
ができました。

私は今、人物画を描いております。  
はじめは形がそれなくて、形がそれ  
なくなるようになると次は肌の色が出せな  
くて悩みました。肌の色がそこそこ  
ごまかせるようになると、肌や衣類  
とその隣に来る色の関係に悩み、陰  
の色に悩みと悩みはつきませんでし  
た。

私は今、人物画を描いております。  
はじめは形がそれなくて、形がそれ  
なくなるようになると次は肌の色が出せな  
くて悩みました。肌の色がそこそこ  
ごまかせるようになると、肌や衣類  
とその隣に来る色の関係に悩み、陰  
の色に悩みと悩みはつきませんでし  
た。

んともに年は私の方が上ですが）の  
作品の中の人物を見ていると、何と  
なく想いが伝わってくるような気が  
しますので、自分にもできるかもし  
れないと思い絵の中の同じところを  
納得するまで描くようにしています。  
好きな絵描きに小杉小一郎さんが  
います、小杉さんの書かれた文章  
の中に「独りが好きでないと絵がか  
けない、でも人が好きでないと絵が  
生きない」というのがあって、もつ  
ともだと思い孤独を感じかけたとき、  
この言葉を思い出し「これから、こ  
こから」と励みにしています。

今は、とりあえず（子供のよう  
でやるぞ」といつて稻刈りが終わっ  
た後の田んぼに連れて行って、本を  
読んで下さいました。その後、先生  
が「人は何でこの世の中  
に生まれてくると思う？」  
と問い合わせられました。  
そして、最後に先生が、  
「先生にもよう分からん  
けど、それを考えるため  
に生まれてきたんと違う  
かなあ」と言われました。  
秋晴れのすがすがしい天  
氣の日だったことを覚え

ています。

私は、まだまだ人生半ばですが、  
ずっとその先生が言われた言葉が心  
のどこかに残っています。今もそう  
です。「人は何のためにこの世に生  
を受けたのか？」この後、どんな人  
生を進んでいけるか私には分かりま  
せんが、自分では納得できるよう進  
んでいきたく思っています。

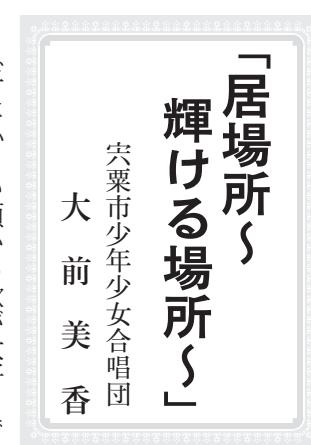
今は、とりあえず（子供のよう  
でやるぞ」といつて稻刈りが終わっ  
た後の田んぼに連れて行って、本を  
読んで下さいました。その後、先生  
が「人は何でこの世の中  
に生まれてくると思う？」  
と問い合わせられました。  
そして、最後に先生が、  
「先生にもよう分からん  
けど、それを考えるため  
に生まれてきたんと違う  
かなあ」と言われました。  
秋晴れのすがすがしい天  
氣の日だったことを覚え

## 「居場所」

### 輝ける場所

宍粟市少年少女合唱団

大前美香



息子は小さい頃から歌が大好きでした。幼い時は歌が得意だと評価されても、学年が大きくなるほど、大きな声で楽しく歌う「歌が大好きな男の子」は「かっこ悪い・ヘン」に見られがちです。親の私も「上手で目立つてからかわれる位なら人並みでいいのに」と思っていました。四年生の冬に学校の先生のすすめで合唱団の見学・体験に来て驚きました。息子のようだ大きな声で楽しそうに歌う、歌が大好きな子ども達がたくさんいたからです。また、丁度年に一回の演奏会にむけての真剣で熱気あふれる練習にも圧倒されました。練習後に分からぬ所を教えてもらい息子が一人声を出し歌った時、それまで賑やかだった場が一瞬静まり「すごい！誰の声？キレイな声！」と歎声があがり注目を浴びました。彼も私も「目立つのは恥ずかしい事」という間違った考えを捨てられまし

た。本当に嬉しかったです。ここなら認めてもらえる・ここなら堂々と大好きな歌を歌つてもへんじやない・ここなら…。居場所を見つけた。そう思えました。その後、入団し指導をうけ、益々歌が好きになり、息子は自分の歌に大きく自信をつけていました。また、いろんな場所での出演や地域テレビ放送などの影響も大きく、「合唱団に入ってる歌のうまい子」と周りから見てもらえるようになりました。彼は、自分の力を発揮できる場所を見つける事ができ、とても充実した時間を過ごせたと思いません。でもそれは、大きさかもしれないがこの「合唱団」という場所があつたからこそなのです。合唱団の歴史は古く、それを存続してもうえてきたからこそ私達親子は出会えました。今後、少子化に伴い団員数も減り運営が厳しくなっていくかもしれません、今後も守り続けていってほしいと思います。きっと誰かにとって必要な居場所だろうから。

## 山崎いさわ 冠句会

中瀬公三選

多すぎる ネット社会の落し穴  
多すぎる 日々犯罪が三面に  
多すぎる 命ひとつが軽くなり  
多すぎる 豪雨災害土砂くずれ  
多すぎる 肩の荷下ろす日暮れ時  
多すぎる 炉の荷下ろす日暮れ時  
多すぎる 先人嘆く放棄田  
多すぎる 田畠みじめな獣被害  
多すぎる 宇田千鶴  
多すぎる 谷笛まや  
多すぎる 実友勉  
多すぎる 炉の荷下ろす日暮れ時  
多すぎる 宇田幸夫  
多すぎる 岩谷志路  
多すぎる 高井怜依  
多すぎる 三木ひづる  
多すぎる 島津千里  
多すぎる 心に留める良い話  
多すぎる メモ用紙  
多すぎる 忘れぬうちに覚え書き  
多すぎる メモ用紙  
多すぎる いつも心の片隅に  
多すぎる メモ用紙  
多すぎる 留守のポストへ走り書き  
多すぎる メモ用紙  
多すぎる 大槻浩美  
多すぎる 山口定子  
多すぎる 成影広子  
多すぎる 君の名を書き線を引く  
多すぎる メモ用紙  
多すぎる メモ用紙  
多すぎる 中瀬公三  
多すぎる 坂本忠彦  
多すぎる 西川少升  
多すぎる 中務淑子



穴粟市山崎文化協会

### 役員及び団体名

森本萬千子	竹添和彦	大西耕雲	三谷恭三	中村秀幸	鶴崎和美	宮坂秋久	西川福岡	石野福岡	中谷慶子	藤永久藏	片山行男	西岡和雄	多江澄之	宇田志水	石田前野	藤省三	清水陽子	和司良造	幸夫
下村浅田	里見耕三	武一悦子	山崎歌人協会	山崎俳句同好会	山崎茶華道協会	山崎謡曲同好会	山崎町郷土能保存会	新潮会	山崎文学会	山崎少女合唱團	山崎俳句協会	さつき民踊グループ	宍粟日本舞踊の会	山崎詩舞道連盟	山崎町民合唱團	山崎民謡連合會	山崎アートクラブ	ターンアートクラブ	山崎いさわ冠句会
下村浅田	里見耕三	武一悦子	山崎歌人協会	山崎俳句同好会	山崎茶華道協会	山崎謡曲同好会	山崎町郷土能保存会	新潮会	山崎文学会	山崎少女合唱團	山崎俳句協会	さつき民踊グループ	宍粟日本舞踊の会	山崎詩舞道連盟	山崎町民合唱團	山崎民謡連合會	山崎アートクラブ	ターンアートクラブ	山崎いさわ冠句会
下村浅田	里見耕三	武一悦子	山崎歌人協会	山崎俳句同好会	山崎茶華道協会	山崎謡曲同好会	山崎町郷土能保存会	新潮会	山崎文学会	山崎少女合唱團	山崎俳句協会	さつき民踊グループ	宍粟日本舞踊の会	山崎詩舞道連盟	山崎町民合唱團	山崎民謡連合會	山崎アートクラブ	ターンアートクラブ	山崎いさわ冠句会
下村浅田	里見耕三	武一悦子	山崎歌人協会	山崎俳句同好会	山崎茶華道協会	山崎謡曲同好会	山崎町郷土能保存会	新潮会	山崎文学会	山崎少女合唱團	山崎俳句協会	さつき民踊グループ	宍粟日本舞踊の会	山崎詩舞道連盟	山崎町民合唱團	山崎民謡連合會	山崎アートクラブ	ターンアートクラブ	山崎いさわ冠句会

「やまとき文化」編集委員会

(敬称略・順不同)

監事 安井 克典  
事務局長 大畑 芳一  
次長 伊藤 大谷  
計 中澤ゆかり 司郎

## 事務局だより

宍粟藩の成立四〇〇年

全くい  
たまにの歴史を扱い、達  
て大きく二点を顧みる節目の年でお  
ります。その一点は『播磨国風土記

て大きく一点を顧みる節目の年であります。その一点は『播磨国風土記』が成立したのが、一三〇〇年前の靈亀元年(七一五)であること。そしてもう一つは、姫路城主池田輝政の四男・輝澄が山崎に入り、宍粟藩が成立した元和元年(一六一五)から四〇〇年の年に当たります。『風土記』については播磨の国一円のことですが、宍粟藩立藩四〇〇年は我宍粟市

に直結するもので

いで功のあつた池田輝政は播磨五二万石を領して姫路に入ります。その

後、慶長十八年（一六一三）輝政が病没し、跡を嫡男利隆が四二万石で継ぎます。残る一〇万石（宍粟、佐用、赤穂）は次男忠繼（岡山藩主）の所領に加えられますが、二年後には忠繼が没します。その跡を三男忠雄が継ぎますが、西播三郡は忠雄の第三名に分与されます。四男輝澄に宍粟三万八千石を、五男政綱に赤穂三万五千石を、六男輝興に佐用二万五千石があてがわれ、元和元年（一六一五）に池田石見守輝澄が独立した宍粟藩の初代藩主として山崎の地に入ってきます。宍粟藩の成立に伴つて、城下町山崎が整つていく出発点となります。

昨年は、NHK大河ドラマ「軍師・官兵衛」で、ご当地の一つとして「官兵衛飛躍の地・宍粟」ののぼり旗があちこちに見られ、「山崎の城」が市の観光の目玉として取り上げられました。一過性の歴史ファンに左右されることなく輝澄が藩主として旧宍粟郡一円を一つのものに作り上げていったその時に思いを馳せ、「温故知新」宍粟市の将来を見据えたいのです。

昨年は、NHK大河ドラマ「軍師・官兵衛」で、ご当地の一つとして「官兵衛飛躍の地・宍粟」ののぼり旗があちこちに見られ、「山崎の城」が市の観光の目玉として取り上げられました。一過性の歴史ファンに左右されることなく輝澄が藩主として旧宍粟郡一円を一つのものに作り上げていったその時に思いを馳せ、「温故知新」宍粟市の将来を見据えたいのです。

いただきました。さらなる研究成果を出されることを念願いたします。荒木さんの今昔千一夜物語の寄稿あり、能楽や邦楽、舞踊、郷土芸能など伝統芸能を継承する会、また、短歌・俳句、美術、コーラスなど多くの趣味の会があり、山崎の街に多彩な文化の燈が輝き続けることを念願いたします。また、子ども達の和太鼓の会、少年少女合唱団の活動報告も頼もしく嬉しく思いました。

いたします。また、子ども達の和太鼓の会、少年少女合唱団の活動報告も頼もしく嬉しく思いました。

なお、毎回、広告という形でご寄付をいただいている方々に衷心より感謝申し上げます。本誌発行の大きな支えになっています。

昨年で「黒田官兵衛」ブームは去りました。これからは播磨国風土記など古来ゆかりの神社・土地など古代ロマン豊かな「宍粟の郡」の物語を外に発信してはどうでしょうか。

時まで「鳥日官只街」などと云はれていました。これからは播磨国風土記など古来ゆかりの神社・土地など古代ロマン豊かな「宍粟の郡」の物語を外に発信してはどうでしょうか。

編集後記

# ほっと、ひといき 伊沢の里

○お祝いの会食 ○法要後の会食

その他各種宴会承ります

リラクゼーションルーム 好評稼働中

〒671-2517 宍粟市山崎町生谷214番地1 TEL0790 (63)1380



Specialty Camera Shop  
**コーエーカメラ**

■本店/〒671-2576  
宍粟市山崎町鹿沢26-3  
TEL(0790) 62-2089 FAX(0790) 62-7429  
E-mail info@ko-e-1972.com

■咲ランド店/〒671-2545  
宍粟市山崎町中井10 咲ランドSC1F  
TEL・FAX(0790) 63-0533  
E-mail saki@ko-e-1972.com

## ふじむら貯衣裳

人生の節目を飾る大切な一着を貴方に

結婚式はもちろん成人式・卒業式・七五三  
また留袖や訪問着・喪服のご衣裳など  
豊富な品揃えでお客様をお待ちしています。



兵庫県宍粟市山崎町山崎181 Tel:0790-62-0052 <http://www.fujimura-kashiishou.com>

デンソー指定サービスステーション

自動車電装品整備・携帯電話代理店・レンタカー

## カメウチ電器株式会社

本社・工場 兵庫県宍粟市山崎町今宿 98-15

T E L (0790) 62-1607(代)

太子営業所・姫路営業所・たつの営業所・福崎店

### 贈り物に…「しそう杉ボールペン&シャープペン」

三菱鉛筆「故郷（ふるさと）の木持ち」シリーズは、地球温暖化と地域材振興策に「少しでも役に立つ商品」をコンセプトに作られた筆記具です。全国の都道府県産のスギ、ヒノキ、ヒバ、マツ等に高度な木材の加工技術を施したもので、適度な重さが高級感を醸し出しています。兵庫県では「しそう杉」が選ばれています。「しそう杉」のほのかな香りをお楽しみ下さい。



¥1,800 + 税

さらにレーザー彫刻（オプション）であなただけの1本に…

参加賞、記念品に…しゃべりんステーショナリー各種あります！

## トクサヤ文具

山崎町山崎 180-1 TEL62-0067

地域で最も信用・信頼される  
金融機関をめざして



森の妖精/ネーチャ

●豊かな街づくりをお手伝いする●

## 西兵庫信用金庫

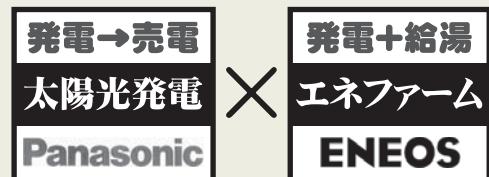
<http://www.shinkin.co.jp/nisisin/>

TEL 0790-62-2020



森の妖精/サッキー

### 貴邸の電力を自給自足!



スマート&工芸な  
**「光熱費=ゼロ」リフォーム**

=お車と住まいの快適、なんなりと=

## ホンジョウ

(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)

本社 宍粟市山崎町中井 96

石油・タイヤ・洗車・オイル  
バッテリー・車両整備・保険

TEL 0790-62-4321

電気・ガス・水道工事・家電全般  
住宅リフォーム・太陽光発電

TEL 0790-63-1234

創業明治28年・さつき本舗



御菓子司 さつき

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の  
真心こめた手づくりの御菓子を

山田店：播州山崎町山田（電）0790-62-0160

福崎店：福崎町西田原 1177（電）0790-22-7555

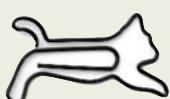


# ForGift

生活に、便利さと楽しさを！  
今文房具が人気です。

テレビで紹介された新しい文房具など

話題商品が続々入荷中！



## イトーオフィスサービス(株)

山崎町中広瀬 117-12 宍粟市役所南向い



NAGATA  
NAGATA GROUP

## 西兵庫トランスポーツ株式会社

本社 兵庫県宍粟市山崎町御名

〒671-2545 TEL 0790-63-2007

FAX 0790-63-2007